

公益財団法人

加藤記念バイオサイエンス振興財団

2025年度 年報

Annual Report 2025



Kato Memorial Bioscience Foundation

公益財団法人

加藤記念バイオサイエンス振興財団

2025年度 年報

Annual Report 2025

Kato Memorial Bioscience Foundation

目 次

ご挨拶	1
I. 2025 年度事業報告（2025 年 4 月 1 日～2026 年 3 月 31 日）	
1. 概要	2
2. 年間の経緯	2
3. 事業	
(1) 助成事業	3
1) 研究助成	3
2) 国際交流助成	6
3) 学会等開催助成	9
(2) 第 16 回研究助成報告交流会	11
(3) 第 37 回研究助成贈呈式	12
(4) 年報の発行	12
(5) パンフレット更新	12
4. 理事会	12
5. 評議員会	13
6. 管理業務	14
7. 人の異動	15
8. 贈呈式等関係資料	16
9. 2025 年度決算	27
II. 2026 年度事業計画	
1. 基本方針	30
2. 事業の内容	30
3. 2026 年度予算	33
4. 2026 年度財団役員等	34
III. 助成者からの報告	
1. 第 35 回研究助成報告	37
2. 第 37 回国際交流助成報告	98

3. 第 36 回学会等開催助成	137
IV. 財団の組織体制	
1. 財団の概要	139
2. 設立の趣旨	139
3. 組 織	140
4. 助成実績および財務状況推移	141
V. 2025 年度募集要項	145
VI. 2025 年度財団役員等	154
おわりに	157

ご挨拶



理事長 大澤 豊

2026年6月5日付で加藤記念バイオサイエンス振興財団の理事長に就任いたしました大澤でございます。財団の理念を受け継ぎ、その発展に向けて誠心誠意努めてまいり所存でございます。

本財団は、協和発酵工業株式会社（現 協和キリン株式会社）の創立者である故加藤辨三郎博士の「科学技術の振興を図り、社会の発展に貢献したい」という遺志のもと、1988年（昭和63年）に設立されました。以来、多くの役員、評議員、選考委員の先生方のご尽力をはじめ、協和キリン株式会社ならびに個人の皆様からの温かいご支援に支えられながら、バイオサイエンス研究の発展に寄与すべく活動を続けてまいりました。ここに改めて深く感謝申し上げます。

設立以来、本財団は将来を担う若手研究者の育成と研究活動の推進を目的として、各種助成事業を継続的に実施してまいりました。2025年度までの累計では、研究助成920名、国際交流助成1,025名、学会等開催助成383件を支援し、その助成総額は、約21億5357万円に達しております。また、公開シンポジウム等を24回開催するとともに、その成果を広く発信することで、バイオサイエンスに対する理解と啓発にも努めてまいりました。

近年、生命科学を取り巻く研究環境は大きく変化し、その成果に対する社会の期待はますます高まっております。本財団では、これまで推進してきたメディカルサイエンス分野およびバイオテクノロジー分野の研究支援に加え、持続可能な社会の実現への貢献が期待される環境バイオ分野の研究支援にも力を注いでおります。

今後も、創造性と独創性に富んだ研究者の挑戦を後押しし、科学技術の発展と社会への貢献に努めてまいります。

本年報には、2023年度（第35回）の研究助成を受けられた研究者の皆様による研究成果報告を掲載しております。これらの報告が研究者相互の交流や新たな研究連携のきっかけとなり、バイオサイエンス分野のさらなる発展につながることを心より願っております。

また、財団ホームページでは、理事・評議員から若手研究者へのメッセージを掲載しております。研究者はもとより、それぞれの立場で挑戦を続ける皆様への応援の思いが込められておりますので、ぜひ併せてご覧いただければ幸いです。

今後とも、本財団の活動に対しまして、皆様の変わらぬご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

I. 2025 年度事業報告

(2025 年 4 月 1 日～2026 年 3 月 31 日)

1. 概要

2025 年 2 月 7 日開催の第 49 回理事会で決議された 2025 年度（2025 年 4 月～2026 年 3 月）事業計画に基づき、バイオサイエンス分野の研究者に対する研究助成、国際交流助成及び学会等開催助成などの諸事業を予定どおり実施した。

2. 年間の経緯 (2025 年 4 月～2026 年 3 月)

2025 年

- 4 月 18 日 会計・業務監査
- 5 月 14 日 第 50 回理事会（決議の省略による方法）文書発信。決議日 5 月 22 日
- 5 月 22 日 第 21 回評議員会招集
- 5 月 23 日 第 51 回理事会招集
- 6 月 6 日 第 21 回評議員会 ハイブリッド開催（於：如水会館）
第 51 回理事会 ハイブリッド開催（於：如水会館）
- 6 月 27 日 2024 年度事業報告及び決算書類提出（内閣府、電子申請）
- 7 月 1 日 第 37 回国際交流助成（下期）募集開始（8 月 31 日締切）
第 37 回研究助成募集開始（9 月 30 日締切）
- 9 月下旬 第 37 回国際交流助成（下期）選考
- 11 月 1 日 第 37 回学会等開催助成募集開始（11 月 30 日締切）
- 11 月 14 日 第 16 回研究助成報告交流会 ハイブリッド開催（於：大手町サンケイプラザ）
- 12 月 26 日 第 37 回研究助成選考委員会、第 37 回学会等開催助成選考会
ハイブリッド開催（於：如水会館）

2026 年

- 1 月 4 日 第 38 回国際交流助成（上期）募集開始（2 月 28 日締切）
- 2 月 6 日 第 52 回理事会 ハイブリッド開催（於：KKR ホテル東京）
- 3 月 6 日 第 37 回研究助成贈呈式 ハイブリッド開催（於：如水会館）
- 3 月 30 日 2026 年度事業計画書及び収支予算書提出（内閣府、電子申請）
- 3 月下旬 第 38 回国際交流助成（上期）選考

3. 事業

(1) 助成事業

2025 年度助成事業のまとめ (2024 年度対比)

事業名	応募件数		助成件数		採択率 (%)		予算 (万円)		実績 (万円)	
	2025	2024	2025	2024	2025	2024	2025	2024	2025	2024
研究助成	200	178	32	31	16.0	17.4	6,300	6,200	6,300	6,100
メディカルサイエンス	134	120	19	19	14.2	15.8	3,900	3,900	※4,000	3,800
バイオテクノロジー	54	50	9	9	16.7	18.0	1,900	1,900	1,800	※1,900
環境バイオ	12	8	4	3	33.3	37.5	500	400	※500	※400
国際交流助成	119	95	36	35	33.6	38.9	900	900	※842	※872
上期	41	47	14	17	36.6	36.2	450	450	※372	※460
下期	78	48	22	18	32.1	41.7	450	450	※470	※412
学会等開催助成	58	45	35	19	60.3	42.2	400	400	450	430

注 1) メディカルサイエンス：2025 年度※4,000 万円は増額 100 万円（優秀賞）2 名分を含む

バイオテクノロジー：2024 年度※1,900 万円は増額 100 万円（優秀賞）1 名分を含む

注 2) 環境バイオ：2025 年度※500 万円、2024 年度※400 万円は、各々増額 100 万円（優秀賞）1 名分を含む

注 3) 国際交流助成：※内定時総額より変動（他研究資金との重複助成による減額又は辞退、余剰金返還等の結果）

※採択率は選考終了時のもの（採択件数≥助成件数）

1) 研究助成

3 つの募集区分に対して 7 月初めから 9 月末まで募集した結果、計 200 名（前年度 178 名）の応募があった。前年度応募が微減となった環境バイオ分野（奨励研究）も二桁に戻った。また、女性研究者の応募は全体で 41 名（前年度 36 名）と引き続き好調であった。選考委員会答申に基づく理事会審議を経て、全 32 名に研究助成（うち、奨励研究 4 名）を行った。

また、助成金増額対象者（+100 万円／優秀賞）について審査した結果、メディカルサイエンス分野 2 名と環境バイオ分野 1 名が優秀賞に選考された。なお、全体の採択率は 16% となった。

助成者名簿を以下に示す。

第 37 回（2025 年度）加藤記念研究助成

1) - 1 メディカルサイエンス分野 助成者（19 名）

番号	氏名	所属	職名	研究題目
1	赤羽 しおり	神奈川県立がんセンター 臨床研究所 がん生物学部	主任 研究員	乳がん悪性化におけるミトコンドリア品質管理の病態的意義の解明
※ 2	飯野 祐介	筑波大学 国際統合睡眠医科学研究機構	研究員	睡眠不足による意思決定異常の細胞基盤の解明
3	五十嵐 亮	慶應義塾大学 医学部 医化学教室	特任 助教	肝細胞と肝非実質細胞との細胞連関からみた脂肪性肝疾患の線維化進展機序の解明
4	磯部 更紗	国際医療福祉大学 三田病院 心臓血管センター	講師	肺高血圧症の遺伝子変異による病態メカニズムの解明
5	及川 真実	東京薬科大学 生命科学部 再生医科学研究室	助教	異種間キメラにおける細胞ニッチ競合の普遍的機構の解明
6	岡野 徳壽	東京科学大学 大学院医歯学総合研究科 細菌感染制御学分野	助教	インフラマソームが制御する口腔細菌による炎症拡散システムの解明
7	金谷 信彦	岡山大学大学院医歯学総合研究科 消化器外科学教室	助教	胃がんにおける腹水内幹細胞様ヘルパー T 細胞の意義と新規治療法の開発
8	菅野 敏生	かずさ DNA 研究所 先端研究開発部 オミックス医科学研究室	研究員	「脂質代謝スイッチと宿主脂質の利用制限」による抗ウイルス応答の新規誘導機構
9	鈴木 智大	群馬大学 生体調節研究所 代謝エピジェネティクス分野	助教	細胞内鉄動態が司る核内エピゲノム調節機構の分子基盤解明
10	高橋 宙大	東北大学 大学院医学系研究科 分子代謝生理学分野	助教	代謝状態に応じた POMC 神経反応可能性決定機構の解明
11	時田 芹奈	新潟大学大学院医歯学総合研究科 がん免疫学分野	助教	ネオ抗原がんワクチン誘導性 CD4 ⁺ T 細胞の機能解析
12	中川 直樹	京都大学大学院医学研究科 人間健康科学系専攻発生発達神経生物学	准教授	てんかん脳におけるオルガネラ病変の分子機序と病理学的意義の解明
13	中野 将希	滋賀医科大学 神経難病研究センター 基礎研究ユニット 神経遺伝学部門	助教	小胞体ストレス応答に対する選択的制御分子の同定と制御機構の解明
14	中村 克行	岐阜大学 工学部 化学・生命工学科 生命化学コース	助教	筋線維の細胞老化に着目した新たな筋疾患治療標的の創出
※ 15	Leonie Brockmann	慶應義塾大学 WPI-Bio2Q	特任 准教授	腸管感染症における GLP-1 を介した免疫-上皮クロストークの解明
16	本田 瑞季	広島大学 大学院統合生命科学研究科	助教	成長期ストレスによる脳可塑性破綻の分子基盤解明

番号	氏名	所属	職名	研究題目
17	山田 真太郎	東京都医学総合研究所 先端基礎医学研究分野	主席 研究員	少数の細胞で生殖細胞におけるゲノム切 断、修復反応を網羅的に検出する
18	山本 将大	九州大学 生体防御医学研究所 分子神経免疫学分野	助教	グリア細胞リポドームカタログを基盤に したアストロサイト細胞特性の理解
19	渡邊 征爾	島根大学 医学部 生命科学講座	准教授	小胞体・ミトコンドリア接触部による炎 症応答制御メカニズムの解析

※優秀賞（100 万円増額）

1) - 2 バイオテクノロジー分野 助成者（9名）

番号	氏名	所属	職名	研究題目
1	伊藤 佑	大阪大学 大学院理学研究科 生物科学専攻	助教	細胞間・染色体間でモザイクな非 CpG 配列での DNA メチル化評価法の開発
2	伊藤 栄紘	東京科学大学 生命理工学院 生命理工学系	助教	リポソームを反応場に用いた金属酵素に よる光駆動メタン／メタノール変換
3	梶山 十和子	東北大学 大学院生命科学研究科 脳生命統御科学専攻 分子行動分野	助教	魚類視覚中枢における特殊神経細胞型の 機能解析
4	白石 太郎	京都大学 大学院理学研究科 化学専攻 生物化学研究室	講師	ペプチド修飾酵素の探索とそれを応用し た機能性分子創製
5	竹田 弘法	埼玉大学大学院理工学研究科 分子生物学科	准教授	ミトコンドリア外膜におけるタンパク質 膜挿入の統合的理解
6	辻 真人	東京大学 大学院理学系研究科 生物科学専攻	助教	4 次元ホログラフィック計測操作法から 探る情報の順序を演算する神経メカニズ ム
7	益村 晃司	広島大学 大学院統合生命科学研究科 生物学プログラム	特任 助教	出芽酵母の寿命を制御するメチオニン代 謝の新規制御因子の探索とその機能解析
8	宮本 皓司	帝京大学 理工学部 総合理工学科	准教授	イネいもち病菌が産生するかび毒素ア ゾン酸によるイネの免疫誘導機構の解明
9	八木 瑛穂	東北医科薬科大学 薬学部 天然物化学教室	助教	カイコ感染モデルを用いた天然資源から の難治性抗酸菌症治療薬の探索

1) - 3 環境バイオ分野 助成者（4名）

番号	氏名	所属	職名	研究題目
※ 1	Vaibhav Pal Singh	京都大学 化学研究所 ケミカルバイオロジー	助教	持続可能な PFAS 除去のための生体模 倣型ペプチド材料
2	中里 一星	東京大学 大学院農学生命科学研究科 植物分子遺伝学研究室	特任 助教	トマトにおける葉緑体ゲノム標的塩 基置換法の開発

番号	氏名	所属	職名	研究題目
3	生井 楓	信州大学 農学部 農学生命科学科	助教	脱フッ素化を担う環境微生物群の探索 と分子機構の解明
4	宮本 昂明	東京科学大学 生体材料工学研究所 ソフトマター医工学分野	講師	活性酸素種に応答する徐放性ナノ粒子 による植物光防護システムの創製

※優秀賞（100 万円増額）

2) 国際交流助成

上期（募集期間 1～2 月）は 41 名の応募があり、15 名に対して計 425 万円の助成が内定した。内定通知の結果、1 名が辞退し補欠 1 名を繰り上げた。その後（補欠者に不採択通知後）、助成者 1 名から諸般の事情で学会参加が取り止めになったとの連絡があり、助成者が 1 名減員となった。

また、オンライン発表への変更等による減額助成もあり、上期は助成者 14 名、実績額 372 万円となった。

下期（同 7～8 月）は、半期で財団歴代第 1 位となる 78 名もの応募があり、25 名に対して計 535 万円（※下期予算 528 万円）の助成が内定した。内定通知の結果、2 名が辞退し、補欠 2 名を繰り上げた。

その後に 3 名から辞退の連絡があったので、下期は助成者 22 名、実績額 470 万円となった。

※当初予算 450 万円＋上期予算未達分 78 万円

辞退 5 名の辞退理由は、他財団との重複助成（他の助成金受給の禁止）が 1 名、演題不採択が 3 名、発表学会の延期が 1 名であった。

以上の結果、年間では助成者 36 名、実績額 842 万円（予算 900 万円）となった。

なお、上・下期ともに正副選考委員長による選考会答申に基づいて理事長決裁されている。

助成者名簿を以下に示す。

第 37 回（2025 年度）国際交流助成（上期）助成者（14 名）

番号	氏名	所属機関	職名	学会名	開催期間	開催場所
1	物江 祐弥	大阪大学 大学院薬学研究科 細胞生理学分野	大学院生	ISEV2025 Annual meeting	2025/4/24 ～4/27	オーストリア
2	山本 晴	東京農工大学 農学府共同獣医学専攻 獣医薬理学研究室	大学院生	American Association for Cancer Research Annual Meeting 2025	2025/4/25 ～4/30	アメリカ
3	真田 隆広	旭川医科大学 医学部 医学科 臨床医学講座 脳神経外科学講座	客員 助教	2025 ISMRM & ISMRT Annual Meeting & Exhibition (ISMRM 2025)	2025/5/10 ～5/16	アメリカ

番号	氏名	所属機関	職名	学会名	開催期間	開催場所
4	宗兼 将之	金沢大学 医薬保健研究域薬学系 臨床分析科学	助教	26th International Symposium on Radiopharmaceutical Sciences	2025/5/11 ～5/15	オーストラリア
5	浦 朋人	筑波大学 数理物質系 物理工学域 蛋白質学研究室	テニユア トラック 助教	Biomolecular condensates: From fundamental principles to applications in health and biotech	2025/5/13 ～5/15	デンマーク
6	繁森 弘基	産業技術総合研究所 生命工学領域 バイオメディカル研究 部門	特別 研究員	Biosensors 2025	2025/5/19 ～5/22	ポルトガル
7	松井 翔	大阪大学 大学院医学系研究科 腎臓内科学	医員	62nd ERA (European Renal Association) congress	2025/6/4 ～6/7	オーストラリア
8	石橋 朋樹	理化学研究所 生命機能科学研究センター フィジカルバイオロジー 研究チーム	基礎科学 特別 研究員	Gordon Research Conference “Cell-Cell Junctions: Integrating Cell Signals and Mechanical Force in Development and Disease”	2025/6/7 ～6/13	スイス
9	大野 誠之	大阪大学 大学院歯学研究科 微生物学講座	助教	ASM Microbe	2025/6/19 ～6/23	アメリカ
10	安藤 紗奈	山口大学 大学院共同獣医学研究科 獣医薬理研究室	大学院生	EMBO Workshop Phosphatases: from basic research to translation	2025/7/27 ～7/31	ドイツ
11	太田 菜央	兵庫県立人と自然の博物館 自然・環境マネジメント 研究部生態研究グループ	博士 研究員	Congress of the European Society for Evolutionary Biology	2025/8/17 ～8/22	スペイン
12	堤 峻太郎	和歌山県立医科大学 薬学部 病態解析学研究室	助教	21st International Conference on the Cell and Molecular Biology of Chlamydomonas	2025/8/24 ～8/29	ドイツ
13	彭 戈	順天堂大学 大学院医学研究科 アトピー疾患研究センター	助教	54th Annual European Society for Dermatological Research Meeting	2025/9/17 ～9/20	フランス
14	矢田部 玲子	東京都立小児総合医療 センター 腎臓・リウマチ膠原病科	医員	32nd European Paediatric Rheumatology Congress	2025/9/17 ～9/20	フィンランド

注) ※所属機関等は申請時のもの

第 37 回（2025 年度）国際交流助成（下期）助成者（22 名）

番号	氏名	所属機関	職名	学会名	開催期間	開催場所
1	北岡 寛己	東京大学 大学院医学系研究科 生殖・発達・加齢医学専攻	大学院生	American Society of Human Genetics 2025 Annual Meeting	2025/10/14 ～10/19	アメリカ

番号	氏名	所属機関	職名	学会名	開催期間	開催場所
2	岩城 翔	名古屋市立大学 大学院医学研究科 耳鼻咽喉・頭頸部外科	助教	ESMO Congress 2025	2025/10/17 ～10/21	ドイツ
3	山本 翔吾	大阪大学 大学院生命機能研究科 鈴木（啓）研究室	大学院生	Frontiers in Genome Engineering 2025	2025/11/4 ～11/6	中国
4	野林 大幹	東北医科薬科大学 医学部 衛生学・公衆衛生学教室	大学院生	Kidney week 2025	2025/11/6 ～11/9	アメリカ
5	田村 俊文	北海道大学 大学院医学研究院 循環器内科学教室	大学院生	AHA Scientific Sessions 2025	2025/11/7 ～11/10	アメリカ
6	梅井 智彦	慶應義塾大学 医学部 循環器内科	助教	AHA Scientific Sessions 2025	2025/11/7 ～11/10	アメリカ
7	高田 春風	徳島大学 大学院医歯薬学研究部 薬物動態制御学分野	助教	Vancouver Nanomedicine Day 2025	2025/11/12	カナダ
8	李 東旻	筑波大学 体育系 運動生化学研究室	博士 研究員	society of neuroscience	2025/11/15 ～11/19	アメリカ
9	大町 紘平	理化学研究所 生命機能科学研究センター 細胞外環境研究チーム	特別 研究員	ASMB 2025 Biennial Meeting	2025/11/16 ～11/19	アメリカ
10	鈴木 龍之介	京都大学 大学院工学研究科 バイオメカニクス分野	大学院生	13th Asian-Pacific Conference on Biomechanics	2025/11/18 ～11/21	ニュージー ランド
11	鈴木 秀政	東北大学 大学院生命科学研究科 植物細胞動態分野	助教	EMBO Workshop Plant evolution: from origins to diversification on land	2025/11/25 ～11/27	オースト リア
12	阪村 颯	兵庫県立大学 大学院理学研究科 生命科学専攻 生体物質化学 I 講座	助教	Asia Pacific Drosophila Research Conference 7	2025/11/30 ～12/4	台湾
13	大城 拓未	北里大学 大学院理学研究科 生命物理学講座	大学院生	The 19th Conference of Asian Crystallographic Association 2025	2025/12/1 ～12/5	台湾
14	堤 大洋	日本大学 文理学部化学科 有機合成化学早川研究室	博士 研究員	The International Chemical Congress of Pacific Basin Societies 2025 (Pacifichem 2025)	2025/12/15 ～12/20	アメリカ
15	磯崎 勇志	兵庫県立大学 大学院理学研究科 化学分析学講座	助教	The International Chemical Congress of Pacific Basin Societies 2025 (Pacifichem 2025)	2025/12/15 ～12/20	アメリカ

番号	氏名	所属機関	職名	学会名	開催期間	開催場所
16	小坂 唯心	大阪大学 大学院工学研究科 生物工学専攻	助教	The International Chemical Congress of Pacific Basin Societies 2025 (Pacifichem 2025)	2025/12/15 ～12/20	アメリカ
17	藤川 昂	物質・材料研究機構 高分子・バイオ材料研究 センター バイオ材料分 野 電気化学ナノバイオ グループ	博士 研究員	The International Chemical Congress of Pacific Basin Societies 2025 (Pacifichem 2025)	2025/12/15 ～12/20	アメリカ
18	劉 嘉瑩	自治医科大学 大学院医学研究科 生理学講座統合生理学部門	大学院生	Biophysical Society 70th Annual Meeting (BPS2026)	2026/2/21 ～2/25	アメリカ
19	南波 憲宏	京都薬科大学 薬学研究科 薬品物理化学分野	大学院生	Biophysical Society 70th Annual Meeting (BPS2026)	2026/2/21 ～2/25	アメリカ
20	Ballester Roig Maria Neus	久留米大学 分子生命科学研究所 個体システム生物学研究 部門	助教	Gordon Research Conference (GRC) Sleep Regulation and Function	2026/3/1 ～3/6	アメリカ
21	西澤 知里	大阪大学 大学院工学研究科 生物工学専攻 微生物機能工学領域	大学院生	The 2026 ASBMB Annual meeting	2026/3/7 ～3/10	アメリカ
22	宇佐美 優奈	埼玉県立大学 大学院保健医療福祉学研 究科 国分研究室	大学院生	Orthopaedic Research Society Annual Meeting 2026	2026/3/27 ～3/31	アメリカ

注) ※所属機関等は申請時のもの

3) 学会等開催助成

11 月の一ヶ月間募集したところ、財団歴代第 3 位となる 58 名の応募があった（前年度 45 件）。

正副選考委員長による選考会答申に基づく理事会審議を経て、20 万円 10 件、10 万円 25 件の合計 450 万円 35 件の助成を行った。各助成額は選考時の成績順に割り振った。

なお予算措置としては、当初予算 400 万円に、国際交流助成の対予算残額から 50 万円を充当した。助成団体名簿を以下に示す。

第 37 回（2026 年度開催）学会等開催助成（35 件）

番号	大会名	申請者	日程	開催場所
1	第 8 回口腔医科学フロンティア研究会	昭和医科大学 大学院歯学研究科 塚崎 雅之	2026/4/12 ～4/13	静岡県
2	第 1 回 免疫学学生の集い コロキウム	東京大学 大学院医学系研究科 井口 聖大	2026/4/24 ～4/26	千葉県

番号	大会名	申請者	日程	開催場所
3	International Symposium on Translational Multi-Omics in Rare Disease 2026	東京女子医科大学 医学部 野口 玲	2026/5月 ～6月	東京都
4	第14回 国際植物ミトコンドリア生物学会議 (ICPMB2026)	東京大学 大学院農学生命科学研究科 山口 明日香	2026/5/18 ～5/22	鹿児島県
5	分子から細胞へ：生体分子システムのAI駆動型マルチスケールシミュレーション	埼玉大学 大学院理工学研究科 松永 康佑	2026/5/28 ～5/30	兵庫県
6	22nd International Symposium on Iron Nutrition and Interactions in Plants (ISINIP)	石川県立大学 生物資源工学研究所 小林 高範	2026/6/22 ～6/26	石川県
7	第4回新型コロナウイルス研究集会・第1回パンデミックウイルス研究集会合同学術集会	京都大学 医生物学研究所 鈴木 干城	2026/7/8 ～7/9	京都府
8	第3回オーラルサポータティブケア教育研究会	東北大学病院 歯学研究科 新垣 理宣	2026/7/11	宮城県
9	第12回細胞生物若手の会交流会	京都大学 大学院生命科学研究科 上田 汐莉	2026/7/12	北海道
10	生体関連化学部会若手の会 第37回サマースクール	東京大学 大学院工学系研究科 古畑 隆史	2026/7/16 ～7/17	千葉県
11	第5回世界キスペプチン会議	名古屋大学 大学院生命農学研究科 上野山 賀久	2026/7/23 ～7/25	愛知県
12	第2回 歯科コスメトロジー研究会シンポジウム	九州歯科大学 口腔機能学講座 鷺尾 絢子	2026/8月頃	福岡県
13	第58回若手ペプチド夏の勉強会	東京薬科大学 薬学部 山田 雄二	2026/8/5 ～8/7	静岡県
14	フリーラジカルスクール 2026	岐阜薬科大学 薬学部 神谷 哲朗	2026/8/6 ～8/7	島根県
15	第6回数理生物学 夏の学校	名古屋大学 大学院理学研究科 赤尾 マルワ	2026/8/20 ～8/22	静岡県
16	第4回 植物生理若手の会 夏の研究発表会	東北大学 大学院工学研究科 山梨 太郎	2026/8/21 ～8/22	愛知県
17	第66回生物物理若手の会 夏の学校	名古屋大学 大学院理学研究科 目黒 瑛暉	2026/8/24 ～8/27	長野県
18	第38回微生物シンポジウム	東京理科大学 薬学部 野口 耕司	2026/8/28 ～8/29	東京都
19	第66回 生命科学夏の学校	九州大学 生物資源環境科学府 古島 波音	2026/8/28 ～8/30	滋賀県
20	第9回 アジア・環太平洋染色体コロキウム (APCC9)	総合研究大学院大学 統合進化科学研究センター 田辺 秀之	2026/9/2 ～9/4	千葉県

番号	大会名	申請者	日程	開催場所
21	第3回 META body 研究会議	筑波大学 数理物質系 浦 朋人	2026/9/12 ～9/13	茨城県
22	日本生物環境工学会 2026 年東京大会	玉川大学 農学部 大橋 敬子	2026/9/15 ～9/16	東京都
23	第3回国際核酸免疫学会年次大会	大阪大学 免疫学フロンティア研究センター 審良 静男	2026/9/16 ～9/18	奈良県
24	第26回若手 NMR 研究会	東京大学 大学院薬学系研究科 原 光太郎	2026/9/28 ～9/30	滋賀県
25	第16回核細胞質間輸送国際会議	滋慶医療科学大学 大学院医療管理学研究科 今本 尚子	2026/10/4 ～10/9	兵庫県
26	第5回 APOE 研究会	広島大学 大学院医系科学研究科 山崎 雄	2026/10/17	広島県
27	RNA フロンティアミーティング 2026	大阪大学 大学院生命機能研究科 藤原 奈央子	2026/10/20 ～10/22	大阪府
28	第109回日本細菌学会関東支部総会	東京科学大学 大学院医歯学総合研究科 芦田 浩	2026/10月	東京都
29	第4回日仏 HIV/AIDS & 感染症基礎シンポジウム	国立感染症研究所 エイズ研究センター第二室 立川 愛	2026/11/5 ～11/7	千葉県
30	第13回 3R+3C+D 国際シンポジウム	名古屋大学 環境医学研究所 荻 朋男	2026/11/8 11/12	長崎県
31	ジベレリン国際シンポジウム：ジベレリン発見 100 周年記念大会	京都大学 化学研究所 林 謙吾	2026/11月 下旬	京都府
32	46th Symposium on Capillary Electrophoresis (SCE2026)	大阪大学 大学院基礎工学研究科 岡本 行広	2026/12/10 ～12/11	大阪府
33	第11回理論免疫学ワークショップ	名古屋大学 大学院理学研究科 岩波 翔也	2027/2/3 ～2/5	未定
34	第12回アジア太平洋国際解剖学会議 (APICA2027)	広島大学 大学院医系科学研究科 池上 浩司	2027/3/17 ～3/19	岡山県
35	第7回環境応答国際シンポジウム	東北大学 東北メディカル・メガバンク機構 山本 雅之	2027/3/27 ～3/28	宮城県

(2) 第16回研究助成報告交流会

2025 年 11 月 14 日（金）に大手町サンケイプラザ（ハイブリッド形式）にて開催した。第 34 回（2022 年度）の助成者等 26 名（うち現地参加 22 名）による口頭発表が行われ、財団役員・選考委員・外部関係者等 33 名が参加し活発な質疑応答が行われた。報告会の後は交流会を開催し、助成者や参加者間の情報交換等を行った。

（３）第 37 回研究助成贈呈式

本年度の研究助成贈呈式を 2026 年 3 月 6 日（金）に如水会館（ハイブリッド形式）にて開催した。選考委員長による選考経過報告の後、研究助成受領者一人ひとりに対し、理事長より助成金目録及び記念盾が贈呈された。その後、協和キリン株式会社・宮本昌志会長より来賓祝辞をいただいた。

引き続き、過去の研究助成者 2 名による下記の特別講演が行われた。

1) 産業技術総合研究所 細胞分子工学研究部門 研究グループ長 岡谷 千晶

「糖鎖空間オミクスが拓く疾患研究の新展開」

2) 山陽小野田市立山口東京理科大学 薬学部 講師 小野田 淳人

「『境界面』から拓く環境毒性学－プロテインコロナが左右する超微小粒子の生体応答－」

参加者は、助成受領者は 32 名中 26 名（全員現地参加）、全体ではオンライン参加者含めて 54 名であった。

式典終了後、会場を移してポスターセッション形式で助成受領者による研究計画発表会後、立食形式の祝賀会を行った。

（４）年報の発行

2025 年 8 月 31 日付けで 2024 年度年報（第 26 号）を 250 部作成し、関係者へ配布した。また財団ホームページから概略版を公開したほか、国会図書館にも納本した。

（５）パンフレット更新

今年度の財団紹介パンフレットを 400 部印刷し関係各所に配布した。また、ホームページで PDF 版を公開した。

4. 理事会

定例理事会 2 回と臨時理事会 1 回を下記のとおり開催し、各理事会の議案は全て承認された。

（１）第 50 回理事会（定例／決議の省略による方法）

理事会の決議があったものとみなされた事項の内容

提案者 理事 三箇山俊文

決議日 2025 年 5 月 22 日（木）

議事録作成者 理事 石田浩幸

同意書 理事 9 名全員、監事 2 名全員（異議ないことを証する書類）

審議事項 ①2024 年度（2024 年 4 月～2025 年 3 月）事業報告及び収支決算報告

②第 21 回評議員会の開催内容

（２）第 51 回理事会（臨時）

日程 2025 年 6 月 6 日（金）

場所	如水会館（※ハイブリッド形式）
出席者	理事 9 名、監事 2 名、事務局長
主な議題	報告事項 ①第 21 回評議員会審議結果 ②代表理事及び業務執行理事の職務執行状況 ③第 50 回理事会報告事項（再掲）

（３）第 52 回理事会（定例）

日程	2026 年 2 月 6 日（金）
場所	KKR ホテル東京（※ハイブリッド形式）
出席者	理事 9 名、監事 2 名、事務局長
主な議題	報告事項 ①第 37 回国際交流助成（下期）助成者 ②2024 年度年報（第 26 号）発行 ③第 16 回研究助成報告交流会 ④基本財産等の運用 ⑤2025 年度決算見込み ⑥代表理事及び業務執行理事の職務執行状況 ⑦事務局トピックス ⑧今後のスケジュール、その他 審議事項 ①第 37 回研究助成受領者の選出 ②第 37 回学会等開催助成対象団体の選出 ③2026～2029 年度選考委員の選出 ④特定費用準備資金の利用計画について ⑤2026 年度事業計画案 ⑥2026 年度収支予算案 ⑦監事監査規程の制定について

5. 評議員会

定例評議員会 1 回を下記のとおり開催し、全議案は承認された。

（１）第 21 回評議員会（定例）

日程	2025 年 6 月 6 日（金）
場所	如水会館（※ハイブリッド形式）
出席者	評議員 6 名、監事 2 名、理事長、常務理事、事務局長
主な議題	報告事項 ①2025 年度事業計画及び収支予算

②第 48 回理事会報告事項

③第 48 回理事会決議事項

④第 49 回理事会報告事項

⑤第 49 回理事会決議事項

⑥第 50 回理事会報告事項

⑦第 50 回理事会決議事項

審議事項

①2024 年度（2024 年 4 月～2025 年 3 月）事業報告及び収支決算報告

6. 管理業務

（１）寄附金受入

2025 年 4 月、協和キリン株式会社より 2025 年度運用財産（事業費及び管理費）として 7,200 万円の寄附を受領した。

（２）ホームページの改訂

各助成対象者について、歴代助成者名簿と共にホームページで公開した。

また財団年報ならびにパンフレットをホームページに掲載した。印刷版の年報には研究助成報告書の全文ならびに国際交流助成の学会参加報告書に掲載し、ホームページでは研究助成報告書は 400 字程度の概要のみの掲載とし、学会参加報告書は掲載していない。

財団理事・評議員・名誉理事 21 名から「若手研究者へのメッセージ」と題して、自身の経験や研究に対する思いなどを書いていただきホームページ上で公開している。

（３）研究助成の広報

公募時に各種広報活動を行った。

1) 募集広告掲載

➤専門誌

「実験医学」 2025 年※7 月号 羊土社 ※電子版：6/20 閲覧開始

➤ホームページなど

①「ポータルサイト掲載」（JST、UMIN_FIND（※1）、助成財団センター）」

②「学会等 HP 掲載」（日本生物工学会、日本農芸化学会、環境バイオテクノロジー学会（※2）、日本薬学会、日本神経学会、日本免疫学会、日本癌学会、日本分子生物学会）

（※1）大学病院医療情報ネットワークセンター

（※2）事務局から会員向けにメール周知もして頂いた

2) 募集のダイレクトメール発信

①300 を超す大学や公的研究機関の窓口に応答（7/9～10）した。

②環境バイオ分野の有力研究室を率いる先生方 100 名強にも直接メール案内をした（7/13）。

3) 当財団助成者・助成団体経路による PR 活動

①研究助成：直近3回の助成者91名および②学会等開催助成：直近3回の助成団体・代表者38名にメールにて、同僚研究員や知人、主催学会等の会員・参加者（若手研究者）を対象とした直接的なPR（口コミ等）を依頼した（8/8）。

4) イベント等に出向いてのPR活動

①インターフェックス Week 東京（於：東京ビッグサイト）に参加し、出展していた大学・研究機関に当財団助成事業のPRを実施（7/11）。

②「微生物ウィーク 2025」（主催：東京大学／開催：7/28～8/2）期間中に発酵化学分野の助成財団による「※共同ブース」にて募集ポスター掲示やパンフ配布を実施した（※野田産業科学研究所が主導、発酵研究所と当財団の3財団が参画）。

（4）債券等情報の収集と検討

基本財産の運用管理のため、証券会社5社から債券市場に関する情報を得た。今期は満期を迎える保有債券はなく、オプション付（期限前償還）債券の権利行使もなかった。なお、流動資産の受贈有価証券（株式）45万株については、主幹事証券会社と検討協議して市場売却方法を工夫しつつ、計249,400株を売却して売却総額7,482万円を特定資産に計上。うち6,500万円を特定費用準備資金として経常収支赤字（想定：5年分）の財源とした。

7. 人の異動

（1）選考委員（敬称略）

藤間祥子、豊島文子、中嶋正敏、藤尾圭志	選考委員就任（2025年4月1日付）
浅原弘嗣、佐藤伸一、滝川浩郷、伏信進矢	選考委員退任（2025年3月31日付）
（参考）	
上杉志成、田口英樹、松浦友亮、村松里衣子	選考委員就任（2026年4月1日付）

8. 贈呈式等関係資料

第 37 回加藤記念研究助成者の皆様へ

理事長 三箇山 俊文

加藤記念バイオサイエンス振興財団の理事長を務めます三箇山でございます。今回、研究助成の対象となられました研究者の皆様、誠にありがとうございます。心よりお祝いを申し上げます。

当財団は、協和発酵工業株式会社を創設いたしました故加藤辨三郎博士の「バイオサイエンスを通じて社会貢献したい」という思いを実現すべく、1988 年 12 月に発足いたしました。故加藤辨三郎博士の思いである、「ライフサイエンス、バイオテクノロジーの幅広い分野で基礎的かつ独創的な研究にチャレンジしている若手研究者を育成する」ということを目的として、皆さんを含めて 920 名の研究者に助成をして参りました。

助成対象者の選考にあたりましては、選考委員長の葛山 智久先生、副委員長の藤尾 圭志先生をはじめ、当該領域を代表する多くの先生方に厳正なる審査を行って頂きました。選考委員の先生方におかれましては、ご多忙の中、貴重なお時間を頂き誠にありがとうございました。

さて、昨年は大阪大学の坂口志文先生と京都大学の北川進先生がノーベル賞を受賞されました。基礎科学の研究を志す皆様にとっても、モチベーションの上がる、とても嬉しいニュースであったと思います。特に坂口先生の「制御性 T 細胞の発見とその機能の解明」に対してノーベル賞が授与されたことは、若かりし頃、同様の分野を研究していた私に取りましては誠に嬉しく素晴らしい受賞だと思っております。

制御性 T 細胞を発見された当時は、免疫反応を抑制する細胞の存在には学界の重鎮の多くが否定的で、先生は、論文審査にも、また研究資金の獲得にも相当ご苦労されたと言うお話はすでに皆さんもご存じのことと思います。多くの免疫学の研究者が研究資金を得るためにこの分野の研究から離れて行った時代でしたが、それでも自分の研究を信じて、奥様と二人だけの小さな研究室を維持しながら何年もかけてエビデ

ンスを固めて行かれました。

決して満足な研究費を得られず、見向きもされない苦しい時期もありながら、それでも研究を続けてこられたのは「正しいことをしているんだ」という信念があったからだ」と語られています。

人類の福祉と繁栄に必ず貢献する基礎研究を志された皆さんにも、これから何度も苦しい時期が来るかも知れません。しかし、今日、厳しい審査を経て当財団の研究助成を受けられることになったことを一つの大きな自信として、これからも、今抱いておられる信念を忘れることなく、ご研究を続けていって頂きたいと心より願っております。

本日ここにお集まりの研究助成対象者は、24 の大学、研究機関に所属されています。私も加藤記念財団は、学部推薦や研究機関推薦の条件を設けることで、特定の大学や研究機関に偏ることなく、日本全国幅広く、独創的な研究を志している研究者を支援していくことを方針としております。

そして、これらの助成を行う上で、協和キリン株式会社には長年にわたり多大なるご支援を頂いております。本日はご来賓として、協和キリン株式会社代表取締役会長の宮本昌志様にもご臨席を賜っております。この場をお借りして厚く御礼を申し上げます。

これからも、当財団の活動が、社会で幅広く理解されご賛同頂けるように継続して努力をしてまいり所存でございますので、引き続きご支援を賜りますようお願い申し上げます。

最後になりますが、改めまして、このたび助成を受けられる研究者の皆様にお祝いを申し上げますとともに、ご研究の更なるご発展を心よりお祈り申し上げ、私のご挨拶とさせていただきます。

選考経過報告

選考委員長 葛山 智久

選考委員長を務めております東京大学大学院農学生命科学研究科の葛山です。研究助成の贈呈を受けられる32名の皆様、おめでとうございます。選考委員会を代表しまして、選考経過報告をさせていただきます。

昨年7月から9月にかけて公募を行った結果、2025年度もバイオサイエンスの幅広い分野から多数のご応募をいただきました。申請件数は、メディカルサイエンス分野134件、バイオテクノロジー分野54件、環境バイオ分野12件の合計200件となり、前年の178件から1割ほど増加しました。また、女性研究者からの応募は41件で、全体の約2割を占めており、こちらも前年の36件を上回る応募があったことは喜ばしい状況です。助成を受けられる皆さまにおかれましては、ぜひ後輩や周囲の方々に、本助成について広くご紹介いただきますようお願い申し上げます。

選考にあたりましては、「独創的、先駆的研究を行う若手研究者を幅広く支援する」という、加藤記念研究助成の基本方針を念頭におくとともに、他の研究助成との重複や研究室・テーマの立ち上げ状況等についても考慮いたしました。それぞれの申請について、選考委員17名が専門分野に応じて、複数名で書面審査を行い、次に選考委員全員が一堂に会して十分な審議を行いました。その結果、メディカルサイエンス分野19件、バイオテクノロジー分野9件、環境バイオ分野4件の合計32件を採択いたしました。競争倍率は全体で約6.3倍となりました。この倍率は、バイオサイエンス系の研究助成の中では決して低い方ではなく、助成を受けられる皆さんは、ご自身の研究に自信をもっていただければと思います。

尚、今回も選考委員会において優れたテーマであると評価された申請が数多くありましたが、その中から3名の方に助成金100万円の増額が決められました。まずメディカルサイエンス分野から2名、筑波大学の飯野 祐介先生と慶應義塾大学の Leonie Brockmann 先生です。そして環境バイオ分野から1名、京都大学の Vaibhav Pal Singh 先生です。誠にありがとうございます。

本日助成を受ける皆様の研究課題は、独創性・先駆性において高い評価を得たものでございます。皆様には、助成金を有効に活用して、研究目標を達成し、バイオサイエンスの更なる発展に貢献していただきたいと思います。後ほど、ポスターセッションで研究のご一端を披露していただきますので、助成者同士でも活発に交流していただければと思います。本助成を通した、研究者同士の交流も非常に重要であると考えています。

ここで少しだけ、個人的な話をさせていただきます。

私自身、皆さんと同じくらいの年代の頃を振り返ってみますと、自分で頭と手を動かして研究に没頭し、極端な話、寝ているときも研究のことを考えているような生活をしていました。当時はとにかく忙しい毎日でしたが、今振り返ると、とても充実した、そして幸せな時間だったように思います。

私は、研究という営みは、ある意味ではロールプレイングゲームのようなものかもしれないと考えています。まだ誰も見たことのない世界を少しずつ探索し、仮説を立てて試し、時には思い通りにいかないこともあります。その試行錯誤を通して少しずつ前に進んでいく。そうして初めて、新しい知見に出会うことができる。実験の結果を最初に目にするのは、世界で自分自身です。その瞬間のワクワク感は、研究ならではの大きな魅力だと思っています。

ぜひ皆様にも、この時期ならではのエネルギーを存分に使って、充実した研究の時間を過ごしていただきたいと思います。加藤記念研究財団の助成が、その一助となれば大変うれしく思います。そして研究成果を公表される際には、Acknowledgement に加藤記念研究財団の助成を受けた旨をぜひご記載ください。選考委員一同、皆様の成果を拝見するのを楽しみにしております。

最後に、助成者のみなさんの今後のご活躍を選考委員一同、心より期待しております。本日は誠にありがとうございました。

特別講演－1

『糖鎖空間オミクスが拓く疾患研究の新展開』

産業技術総合研究所 細胞分子工学研究部門 研究グループ長
岡谷 千晶

1. 背景：糖鎖空間オミクスのコンセプト

糖鎖はタンパク質の立体構造や安定性、細胞間相互作用、免疫応答など多様な生命現象を制御する主要な翻訳後修飾であり、その異常はがんや老化など多くの疾患に深く関与する。近年、糖鎖構造を診断や治療標的として活用する「糖鎖創薬」が注目されている。疾患理解や創薬応用においては、糖鎖修飾の構造情報に加えて、その位置情報を統合的に把握することが不可欠である。この課題に対し我々は、組織スケールからサブセラーレベルまで糖鎖修飾を可視化する「糖鎖空間オミクス (spatial glycomics / glycoproteomics)」の実現を目指して研究を進めている¹⁾。

2. マルチモーダル糖タンパク質解析基盤の構築

糖鎖は構造が極めて多様かつ複雑であるため、その空間的理解には複数の解析技術を統合する

多角的アプローチが不可欠である。我々は、レクチン相互作用解析による迅速簡便な概要解析と、質量分析による糖鎖詳細構造やキャリアタンパク質の同定を融合させた、マルチモーダル糖タンパク質解析戦略を推進している (図)²⁾。

疾患関連糖鎖の探索に用いる In-solution の組織糖鎖プロファイリング技術として、レーザーマイクロダイセクション (LMD) とレクチンマイクロアレイ (LMA) を組み合わせた糖鎖プロファイリングを確立し³⁾、さらなる高感度化により微小領域 (約 60 細胞) を分析可能とした⁴⁾。続くキャリアタンパク質を効率的に同定するため、質量分析による in-solution のグライコプロテオーム解析法 (Glyco-RIDGE 法) の自動化ソフトウェア (GRable) を開発した⁵⁾。また、取得データの統合・共有基盤として、LMA 解析に基づく組織糖鎖データのリポジトリシステム LM-GlycoRepo⁶⁾および可視化ツール

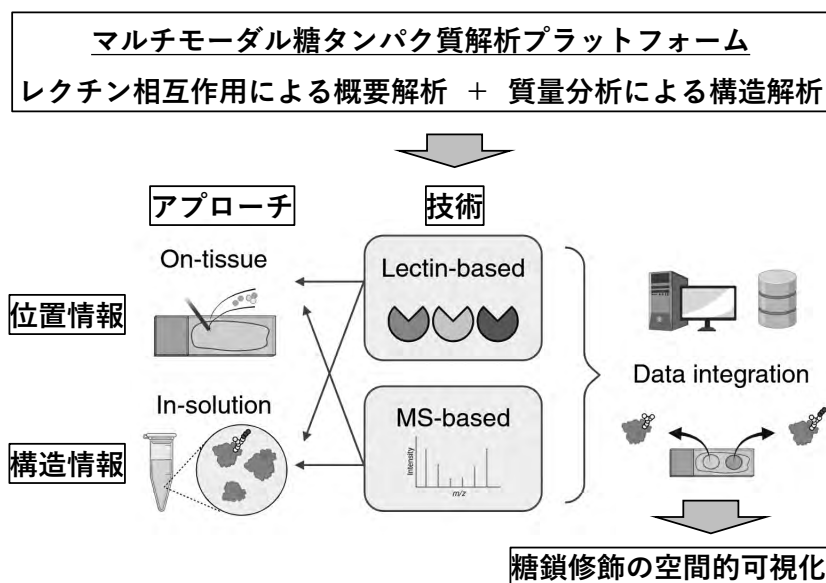


図. マルチモーダル糖鎖空間オミクス解析戦略の概念 (文献 2 を改変)

LM-GlycomeAtlas⁷⁾を開発・公開している。これらの組織糖鎖データとグライコプロテオームデータを統合することで、マウス組織間の糖鎖不均一性を部位特異的グライコフォームのレベルで明らかにしている⁸⁾。

さらなる挑戦として、現在は、これらの in-solution 解析技術により取得された糖鎖情報を位置情報と統合して把握するため、組織標本上の糖鎖・キャリアタンパク質・細胞タイプを1細胞レベルで可視化する On-tissue 解析技術 (Lectin-IMC 技術) の開発を進めている。

3. 疾患応用：心筋線維化に伴う糖鎖異常の可視化

心筋線維化は多くの心疾患の共通基盤であり、細胞外マトリックス (ECM) の過剰沈着により心機能障害を引き起こす。従来はコラーゲン量の検出が評価指標であったが、「線維をつくる活性」を反映する分子指標の確立が求められている。我々は、拡張型心筋症 (DCM) モデルマウスを用いた LMD-LMA 解析により、Wisteria floribunda agglutinin (WFA) 結合糖鎖が線維化部位で顕著に増加した。またグライコプロテオミクスにより WFA 結合糖鎖キャリアタンパク質を同定することで、この変化は主に ECM 関連タンパク質上の N 型糖鎖修飾異常に由来することを見出した⁹⁾。また、高血圧性心不全モデルラット心臓について、WFA 染色に基づく線維化に注目した高精度 LMD-LMA 解析により、新たな線維化関連糖鎖変化として、Maackia amurensis lectin (MAH) 結合 O 型糖鎖の増加を見出したが、これは、糖転移酵素群の遺伝子変動と連動していた¹⁰⁾。本講演では、さらに、Lectin-IMC 解析を用いてこれらの異常糖鎖修飾の空間分布を可視化し、線維化微小環境における糖鎖修飾異常を「空間的現象」として捉える取り組みを紹介したい。

4. まとめと展望

本研究は、レクチン相互作用解析、質量分析、空間イメージングおよび情報統合を融合させ、糖鎖修飾の「位置」と「構造」を統合的に可視化する糖鎖空間オミクス基盤の深化を目指すものである。臓器線維化をはじめとする病態において、糖鎖修飾異常を空間的現象として捉えることは、新たな分子指標や治療標的の創出につながる可能性を秘めている。未踏の領域であるがゆえに、技術開発と統合を継続的に深化させることで、疾患・創薬研究の新展開を切り拓いていきたい。

【参考文献】

- 1) Boottanun P, Fuseya S, Kuno A. BBA Adv. 7:100146 (2025).
- 2) 岡谷千晶, 久野敦. 月間細胞. 57(13):83-85 (2025).
- 3) Zou X, Yoshida M, Nagai-Okatani C, Iwaki J, Matsuda A, Tan B, Hagiwara K, Sato T, Itakura Y, Noro E, Kaji H, Toyoda M, Zhang Y, Narimatsu H, Kuno A. Sci Rep. 7:43560 (2017).
- 4) Boottanun P, Nagai-Okatani C, Nagai M, Ungkulpasvich U, Yamane S, Yamada M, Kuno A. Anal Bioanal Chem. 415(28):6975-6984 (2023).
- 5) Nagai-Okatani C, Tominaga D, Tomioka A, Sakaue H, Goda N, Ko S, Kuno A, Kaji H. Mol Cell Proteomics. 23(9):100833 (2024).
- 6) Nagai-Okatani C, Fujita N, Boottanun P, Tanaka M, Shiota M, Shinmachi D, Angata K, Aoki-Kinoshita K, Kuno A. J Proteome Res. 24(7):3569-3577 (2025).
- 7) Nagai-Okatani C, Zou X, Fujita N, Sogabe I, Arakawa K, Nagai M, Angata K, Zhang Y, Aoki-Kinoshita KF, Kuno A. J Proteome Res. 20(4):2069-2075 (2021).
- 8) Nagai-Okatani C, Tomioka A, Tominaga D, Sakaue H, Kuno A, Kaji H. Anal Bioanal Chem. 417(5):973-988 (2025).
- 9) Nagai-Okatani C, Minamino N. PLoS One. 11(6):e0150210 (2016).
- 10) Nagai-Okatani C, Nishigori M, Sato T, Minamino N, Kaji H, Kuno A. Lab Invest. 99(11):1749-1765 (2019).

特別講演－2

『『境界面』から拓く環境毒性学 ープロテインコロナが左右する超微小粒子の生体応答ー』

山陽小野田市立山口東京理科大学 薬学部薬学科 小野田研究室 講師
小野田 淳人

● 粒子の毒性学と認知症

大気および水圏には、自然起源・人為起源を問わず多様な微小粒子が遍在しており、その健康影響の解明と予防戦略の確立が国際的課題となっている。2020 年、Lancet 国際委員会は、認知症予防のために優先して対策すべき 12 の危険因子の一つに、唯一の環境問題として「大気汚染（主に粒子）」を挙げ、粒子毒性評価の重要性を改めて浮き彫りにした¹⁾。とりわけ超微小粒子（＜100 nm）は、極端に大きな比表面積と高い界面エネルギーを有し、粗大粒子やバルク材料とは異なる物理化学的挙動に基づく独特の生体応答を引き起こす。さらに、吸入された超微小粒子は嗅神経や三叉神経を介して脳へ侵入し得ることが報告され、中枢神経疾患との関連が注目されている²⁾。

しかし、粒子が脳に到達するという事実と、いかなる分子機構を介して病態へ結びつくのかという問いの間には、依然として大きな空白が存在する。本講演では、脳の境界領域に生じる特異な病理像を起点に、プロテインコロナ（粒子表面にタンパク質が吸着して形成される被覆層）の質的変容を介した新しい毒性機構について紹介する。

● 脳「境界」領域に出現する病理と沈着分布の乖離

従来の毒性評価では、研究対象の体内動態に基づいて標的臓器や細胞を設定する枠組みに依拠してきた。しかし超微小粒子では、脳内沈着分布の定量的・網羅的把握が技術的に困難であり、沈着情報に基づく標的同定には限界がある。そこで我々は、沈着の可視化に依存せず、曝露後の病理応答を全脳スケールで俯瞰的に解析し、鋭敏に応答する領域・細胞を探索した。その結果、微量曝露にもかかわらず、脳血管周囲で顕著な病変が認められ、脳境界型マクロファージの形態異常と、それに隣接するアストロサイトの過剰活性化が観察された^{3), 4)}。一方、電子顕微鏡と元素分析により粒子を探索しても、粒子は血管周囲に限局せず脳実質の広域に散在しており、沈着部位と病変部位が一致しない、いわば病理と沈着の「空間的乖離」が示唆された。

この矛盾を手掛かりに、材料工学分野で用いられる赤外分光法を組織病理へ応用し、*in situ* 赤外分光分析と組織病理学的解析を融合した解析系を構築した。その結果、血管周囲病変部において、異常構造化タンパク質の集積と小胞体ストレス応答の亢進が認められた^{5), 6)}。これらの所見は、血管周囲空間を介した脳内クリアラン

ス機構 (glymphatic system) ととも整合し、超微小粒子の毒性機構を「異常構造化タンパク質の生成・排出・集積」という観点から再解釈する端緒となった。

● 粒子-生体「境界面」におけるタンパク質構造異常化

認知症は、タンパク質の異常構造化と凝集を基盤とする proteinopathy として理解される側面を持つ。この観点から、粒子曝露による認知症リスク増加の背景には、「粒子界面で形成されるプロテインコロナと、それに伴う構造変容が関与する可能性がある」との仮説が考えられ、本助成の支援を受けて検証を進めてきた。

これまでに、原子間力顕微鏡、赤外分光分析、分子動力学計算等を組み合わせ、粒子の曲率、表面電荷、結晶欠陥といった界面因子が、吸着タンパク質の構造を変容させることを示唆した^{7), 8)}。さらに、体外で調製した「異常構造化タンパク質コロナを付与した粒子」を脳内投与すると、粒子単独投与と異なり、脳境界型マクロファージやミクログリアに取り込まれ、自然免疫関連経路やサイトカイン応答の変調を伴って行動表現型の変化が誘発された。すなわち、「粒子そのもの」の直接作用に加え、「粒子-生体間の境界面」で生じるタンパク質構造変化を介した、超微小粒子の新規毒性機構の可能性が見えてきたのである。本成果は、粒子のリスク評価を濃度中心から表面特性中心へ拡張するものであり、規制科学・公衆衛生・産業安全におけ

る評価指標の高度化に貢献する。

● 新助成者へのメッセージ：「境界面」こそが、研究を深める

今日、研究課題はますます複雑化している。現代の重要課題の多くは、単一分野の内部よりも、学問分野の「境界面」に存在する。粒子と生体の境界面を探究する過程は、同時に学問分野と学問分野の境界面に立つ営みでもあった。

この「境界面」を突破する鍵こそが学際研究である。個人が習得できる専門性や技術には自ずと限界があり、単独で解決できる問題の範囲も限定的である。ゆえに、学際研究を成果へと結実させるには、自身の研究の核となる問いを明確にしつつ、他者に提供できる独自技術を確立することが不可欠である。それを踏まえ、相互に価値提供が成立する協働設計の構築が成否を左右する。実際に、本助成を契機とした異分野研究者との共同研究により、私の研究は当初の想像を遥かに超えて広がった。

粒子と生体の境界が新しい生体応答の機構を生むように、学問の境界もまた、新しい知を創出する。新たに助成を受けられる皆様には、ぜひその「境界面」に立ち、自身の研究の問いを深化していただきたい。

【参考文献】

- 1) Livingston et al., *Lancet*, 2020.
- 2) Schraufnagel, *Exp Mol Med*, 2020.
- 3) Onoda et al., *PLoS ONE*, 2014.
- 4) Onoda et al., *P&FT*, 2017.
- 5) Onoda et al., *Front Cell Neurosci*, 2017.
- 6) Onoda et al., *Sci Rep*, 2020.
- 7) Sakaguchi et al., *Langmuir*, 2025.
- 8) Kaumbekova et al., *Environ Sci Process Impacts*, 2025

第37回 加藤記念研究助成 贈呈式



三箇山 俊文 理事長



葛山 智久 選考委員長



宮本 昌志
協和キリン(株) 代表取締役会長





第 37 回 加藤記念研究助成受領者と財団関係者

特別講演



岡谷 千晶
産業技術総合研究所
細胞分子工学研究部門 研究グループ長



小野田 淳人
山陽小野田市立山口東京理科大学
薬学部 講師

ポスターセッション



第37回 加藤記念研究助成贈呈式 式次第 2026年3月6日(金) 15:00～19:00 如水会館

1. 贈呈式

1) 理事長挨拶

2) 選考経過報告

選考委員長

東京大学大学院農学生命科学研究科 教授

葛山 智久

3) 記念盾贈呈

4) 来賓祝辞

協和キリン(株) 代表取締役会長

宮本 昌志

2. 特別講演会

1) 産業技術総合研究所 細胞分子工学研究部門 研究グループ長

岡谷 千晶

2) 山陽小野田市立山口東京理科大学 薬学部 講師

小野田 淳人

3. 研究計画発表会 (ポスターセッション)

4. 祝賀会

第16回 加藤記念研究助成報告交流会

式 次 第

2025年11月14日（金）10:30～19:30
大手町サンケイプラザ 3階 311室&Zoom

1. 開会挨拶 石田常務理事
2. 研究成果報告会（口頭発表）
3. 閉会挨拶 三箇山理事長
4. 交流会



9. 2025 年度決算

貸 借 対 照 表

2026 年 3 月 31 日現在

(単位：円)

科 目	当年度	前年度	増減
I 資 産 の 部			
1. 流動資産			
現 金	44,584	39,384	5,200
普通預金	90,083,378	14,449,849	75,633,529
定期預金	12,000,195	12,000,195	0
有価証券	58,775,800	142,650,000	▲ 83,874,200
流動資産合計	160,903,957	169,139,428	▲ 8,235,471
2. 固定資産			
(1) 基本財産			
普通預金	8,185,000	9,139,000	▲ 954,000
定期預金	3,173,297	3,173,297	0
投資有価証券	824,290,887	834,214,106	▲ 9,923,219
基本財産合計	835,649,184	846,526,403	▲ 10,877,219
(2) 特定資産			
助成事業準備預金	63,224,320	0	63,224,320
特定資産合計	63,224,320	0	63,224,320
固定資産合計	898,873,504	846,526,403	52,347,101
資産合計	1,059,777,461	1,015,665,831	44,111,630
II 負 債 の 部			
1. 流動負債			
未払金	189,354	522,978	▲ 333,624
預り金	72,000,000	0	72,000,000
流動負債合計	12,507	15,918	▲ 3,411
負債合計	72,201,861	538,896	71,662,965
III 正 味 財 産 の 部			
1. 指定正味財産			
寄附金	701,799,184	701,876,403	▲ 77,219
受贈投資有価証券	131,850,000	142,650,000	▲ 10,800,000
指定正味財産合計	833,649,184	844,526,403	▲ 10,877,219
(うち基本財産への充当額)	(833,649,184)	(844,526,403)	(▲ 10,877,219)
(うち特定資産への充当額)	(0)	(0)	(0)
2. 一般正味財産			
(うち基本財産への充当額)	(2,000,000)	(2,000,000)	(0)
(うち特定資産への充当額)	(63,224,320)	(0)	(63,224,320)
正味財産合計	987,575,600	1,015,126,935	▲ 27,551,335
負債 及び 正味財産合計	1,059,777,461	1,015,665,831	44,111,630

正味財産増減計算書

2025 年 4 月 1 日から 2026 年 3 月 31 日まで

(単位：円)

科 目	当年度	前年度	増減
I 一般正味財産増減の部			
1. 経常増減の部			
(1) 経常収益			
基本財産受取利息	9,326,793	9,326,063	730
受取寄付金	72,000,000	72,000,000	0
受取寄付金	72,000,000	72,000,000	0
指定正味財産よりの振替額	0	13,141,140	▲ 13,141,140
運用財産受取利息	314,708	64,732	249,976
経常収益計	81,641,501	94,531,935	▲ 12,890,434
(2) 経常費用			
事業費			
支払助成金	75,929,093	74,020,000	1,909,093
研究助成	63,000,000	61,000,000	2,000,000
国際交流助成	8,429,093	8,720,000	▲ 290,907
学会等開催助成	4,500,000	4,300,000	200,000
会議費	3,710,584	3,587,172	123,412
諸謝金	4,287,764	4,254,353	33,411
旅費交通費	1,607,115	1,736,842	▲ 129,727
印刷製本費	600,678	574,192	26,486
消耗品費	937,275	893,339	43,936
通信運搬費	1,119,454	3,636,002	▲ 2,516,548
雑費	59,130	52,935	6,195
事業費計	88,251,093	88,754,835	▲ 503,742
管理費			
役員報酬	1,184,692	1,162,418	22,274
会議費	936,033	853,229	82,804
旅費交通費	317,650	317,101	549
印刷製本費	163,402	145,490	17,912
消耗品費	26,677	34,333	▲ 7,656
通信運搬費	309,908	303,028	6,880
会費	193,375	193,375	0
雑費	502,608	495,159	7,449
管理費計	3,634,345	3,504,133	130,212
経常費用計	91,885,438	92,258,968	▲ 373,530
評価損益等調整前当期経常増減額	▲ 10,243,937	2,272,967	▲ 12,516,904
有価証券評価損益等	▲ 76,591,720	129,508,860	▲ 206,100,580
評価損益等計	▲ 76,591,720	129,508,860	▲ 206,100,580
当期経常増減額	▲ 86,835,657	131,781,827	▲ 218,617,484
2. 経常外増減の部			
(1) 経常外収益			
有価証券売却益	67,542,430	0	67,542,430
過年度分返還助成金	2,619,111	0	2,619,111
経常外収益計	70,161,541	0	70,161,541
(2) 経常外費用	0	0	0
当期経常外増減額	70,161,541	0	70,161,541
当期一般正味財産増減額	▲ 16,674,116	131,781,827	▲ 148,455,943
一般正味財産期首残高	170,600,532	38,818,705	131,781,827
一般正味財産期末残高	153,926,416	170,600,532	▲ 16,674,116
II 指定正味財産増減の部			
基本財産受取利息	4,526,781	4,526,781	0
一般正味財産への振替額	▲ 4,604,000	▲ 17,745,140	13,141,140
基本財産評価損益	▲ 10,800,000	▲ 285,208,860	274,408,860
当期指定正味財産増減額	▲ 10,877,219	▲ 298,427,219	287,550,000
指定正味財産期首残高	844,526,403	1,142,953,622	▲ 298,427,219
指定正味財産期末残高	833,649,184	844,526,403	▲ 10,877,219
III 正味財産期末残高	987,575,600	1,015,126,935	▲ 27,551,335

財 産 目 録

2026 年 3 月 31 日現在

(単位：円)

貸借対照表科目		場所・物量等	使用目的等	金額	
(流動資産)	現金預金	現金	手元保管	44,584	
		普通預金	みずほ銀行 相模大野支店	4,954,858	
			PayPay 銀行 すずめ支店	85,102,711	
			みずほ銀行 町田支店	25,809	
	定期預金	PayPay 銀行 すずめ支店	12,000,195		
	現金預金合計			102,128,157	
その他流動資産	有価証券	上場株式（1銘柄）	寄附により受け入れた株式であり、売却目的で短期保有している。	58,775,800	
	その他流動資産合計			58,775,800	
流動資産合計				160,903,957	
(固定資産)	基本財産	普通預金	PayPay 銀行 すずめ支店	8,185,000	
				8,185,000	
		定期預金	みずほ銀行 町田支店	3,173,297	
				3,173,297	
		投資有価証券	国債	新規購入した満期保有目的債券の余剰金	824,290,887
				満期保有目的で保有し、利息を公益目的事業および管理運営の財源としている。	100,623,790
				満期保有目的で保有し、利息を公益目的事業および管理運営の財源としている。	100,000,000
				満期保有目的で保有し、利息を公益目的事業および管理運営の財源としている。	100,000,000
				満期保有目的で保有し、利息を公益目的事業および管理運営の財源としている。	100,000,000
				満期保有目的で保有し、利息を公益目的事業および管理運営の財源としている。	100,000,000
				満期保有目的で保有し、利息を公益目的事業および管理運営の財源としている。	100,000,000
				満期保有目的で保有し、利息を公益目的事業および管理運営の財源としている。	93,445,734
		東京電力パワーグリッド社債	満期保有目的で保有し、利息を公益目的事業および管理運営の財源としている。	98,371,363	
				131,850,000	
	特定資産	基本財産合計			846,526,403
		助成事業準備預金	PayPay 銀行 すずめ支店	助成事業費へ充当するための資産であり、特定費用準備資金として管理している。	63,224,320
		特定資産合計			63,224,320
固定資産合計				898,873,504	
資産合計				1,059,777,461	
(流動負債)	未払金	助成金及び通信運搬費他に対する未払額	公益目的事業に供する学会等開催助成金、通信運搬費および管理運営に供する通信運搬費他の未払分	189,354	
	前受金 預り金	出捐企業からの寄附金 源泉徴収税支払に対する預かり額	2026年度運用財産 公益目的事業に供する書面審査料等に対する源泉徴収税の預かり分	72,000,000	
				12,507	
流動負債合計				72,201,861	
負債合計				72,201,861	
正味財産				987,575,600	

Ⅱ．2026 年度事業計画

(2026 年 4 月 1 日より 2027 年 3 月 31 日まで)

1. 基本方針

2026 年度は前年度に引き続き、バイオサイエンス分野において 3 つの助成事業（研究助成、国際交流助成、学会等開催助成）を実施する。研究助成については、2026 年度は前年度と同程度の予算額とし、前年度（200 名）と同水準の応募確保に向けて引き続き広報活動に重点的に取り組む。また、選考委員等からの意見・提案等に耳を傾け、応募者目線での点検も加味して、募集～選考までの各プロセスに対して必要な改善を検討・実施する。環境バイオ分野（奨励研究）の応募増に向けても引き続き効果的な PR 活動を行う。国際交流助成及び学会等開催助成は、前年度ともに財団歴代第 3 位となる旺盛な応募があった。予算額については、前者は前年度対比で 50 万円増額、後者は同額とした。

これらを踏まえて、前年度実績ベースで想定した 2026 年度の助成 3 事業の予算総額は 75.5 百万円、経常収支全体では約 14.5 百万円の赤字となるが、寄附にて保持している株式の一部を売却して得た金額（約 6500 万円）を 2025 年度決算から特定費用準備資金に計上し（利用計画は 2026 年 2 月 6 日開催の理事会第 4 号議案承認にて決定）、上記赤字補填の原資として計画的に活用していく。

2. 事業の内容

（1）第 38 回加藤記念研究助成

助成の概要 : バイオサイエンス分野における有能な若手研究者を発掘し、その創造的かつ先駆的研究を支援することを目的とする。合わせて環境バイオ分野における SDGs (Sustainable Development Goals : 持続可能な開発目標) への貢献を目指す。

助成対象者 : メディカルサイエンス分野およびバイオテクノロジー分野の研究者。年齢制限は 40 歳以下、ただし博士号取得後 10 年以内であれば 41 歳以上の応募も可。環境バイオ分野（奨励研究）枠においては年齢制限を 35 歳以下、博士号取得後 5 年以内であれば 36 歳の応募も可とする。また産休・育休・介護・疾病等による休業取得者は、その休業期間だけ年齢制限を延長することができる。

助成金額 : メディカルサイエンス分野およびバイオテクノロジー分野で計 27 名程度、各 200 万円を助成。環境バイオ分野は 5 名程度、各 100 万円を助成。さらに全助成者の中から優秀賞を 3 名程度、各 100 万円を増額。

助成総予算 6200 万円。（前年実績見込 6300 万円／2024 年度返還額により増枠）

募集方法 : 公募。申請者の所属する機関（部局）の長の推薦を要する。

応募期間 : 2026 年 7 月 1 日～9 月 30 日

選考 : 選考委員会にて審査し、その答申に基づき理事会で決定する。

(2) 第 38 回加藤記念国際交流助成

- 助成の概要 : 有能な若手研究者の国際交流推進を目的として、海外の学会等で発表する際の渡航費等を助成する。
- 助成対象者 : 海外で開催されるバイオサイエンス分野の学会、シンポジウム等で、自己の国内での研究成果を発表予定の研究者
- 助成金額 : 渡航先により 10 万円から 30 万円。助成総予算 950 万円。(前年実績 843 万円)
- 募集方法 : 公募。申請者の所属する研究機関の上長の推薦を要する。
- 応募期間 : 上期 2026 年 1 月 4 日～2 月 28 日 (4 月～9 月までの学会対象)
下期 2026 年 7 月 1 日～8 月 31 日 (10 月～翌年 3 月までの学会対象)
- 選考 : 選考会または書面にて審査し、その答申に基づき理事長が決定する。

(3) 第 38 回加藤記念学会等開催助成

- 助成の概要 : 新たな研究領域の発展・研究者交流の促進を目的に、学会・研究会等の開催を支援する。
- 助成対象 : 国内外で開催されるバイオサイエンス分野の比較的小規模の学会等
- 助成金額 : 一件当たり 10 万円、20 万円、30 万円のいずれか。助成総予算 400 万円。
(前年実績見込 450 万円／国際交流助成の予算残により増枠)
- 募集方法 : 公募
- 応募期間 : 2026 年 11 月 1 日～11 月 30 日
- 選考 : 選考会にて審査し、その答申に基づき理事会で決定する。

(4) 第 17 回加藤記念研究助成報告交流会

第 35 回研究助成受領者(研究助成期間:2024 年 4 月から 2026 年 3 月まで)を対象に、第 17 回研究助成報告交流会を 2026 年 11 月頃に開催し、研究者・関係者間の交流を図りバイオサイエンスの発展に資する。

(5) 第 38 回加藤記念研究助成贈呈式

第 38 回研究助成の贈呈式を 2027 年 3 月 5 日(金)に開催する。研究助成受領者による研究計画発表、特別講演および祝賀会を併せて行い、関係者間の交流を図る。

（６）財団年報（第 27 号）発行、パンフレット更新

当財団の事業活動を社会に普及し、バイオサイエンスの推進・啓発に資するため、2025 年度の事業活動及び助成者からの報告等をまとめた財団年報（第 27 号）を 8 月前後に発行する。内容の一部は財団 HP にも掲載する。併せて財団パンフレットを更新し HP にも掲載する。

3. 2026 年度予算

2026 年度 収支予算書

2026 年 4 月 1 日より 2027 年 3 月 31 日まで

(単位：円)

科 目	公益目的事業会計	法人会計	計
I 一般正味財産増減の部			
1. 経常増減の部			
(1) 経常収益			
基本財産受取利息	7,461,378	1,865,345	9,326,723
受取寄付金	96,000	24,000	120,000
運用財産受取利息	64,800,000	7,200,000	72,000,000
経常収益計	72,357,378	9,389,345	81,746,723
(2) 経常費用			
事業費			
支払助成金	75,500,000		75,500,000
研究助成	62,000,000		62,000,000
国際交流助成	9,500,000		9,500,000
学会等開催助成	4,000,000		4,000,000
会議費	4,000,000		4,000,000
諸謝金	4,300,000		4,300,000
旅費交通費	2,000,000		2,000,000
印刷製本費	600,000		600,000
消耗品費	950,000		950,000
通信運搬費	3,800,000		3,800,000
雑費	40,000		40,000
事業費計	91,190,000		91,190,000
管理費			
役員報酬		2,000,000	2,000,000
会議費		950,000	950,000
旅費交通費		600,000	600,000
印刷製本費		200,000	200,000
消耗品費		50,000	50,000
通信運搬費		330,000	330,000
会費		200,000	200,000
什器備品費		50,000	50,000
雑費		650,000	650,000
管理費計		5,030,000	5,030,000
経常費用計	91,190,000	5,030,000	96,220,000
当期経常増減額	▲ 18,832,622	4,359,345	▲ 14,473,277
2. 経常外増減の部			
(1) 経常外収益	0	0	0
(2) 経常外費用	0	0	0
他会計振替額			
当期経常外増減額	0	0	0
当期一般正味財産増減額	▲ 18,832,622	4,359,345	▲ 14,473,277
一般正味財産期首残高	▲ 193,556,438	347,482,854	153,926,416
一般正味財産期末残高	▲ 212,389,060	351,842,199	139,453,139
II 指定正味財産増減の部			
固定資産受贈益			
投資有価証券受贈益	0	0	0
固定資産受贈益計	0	0	0
当期指定正味財産増減額	0	0	0
指定正味財産期首残高	672,175,804	161,473,380	833,649,184
指定正味財産期末残高	672,175,804	161,473,380	833,649,184
III 正味財産期末残高	459,786,744	513,315,579	973,102,323

4. 2026 年度財団役員等

理 事

(2026 年 8 月 1 日現在)

理事長 (非常勤)	大 澤 豊	前 協和キリン(株) 取締役副社長
常務理事 (非常勤)	石 田 浩 幸	協和キリン(株) 開発本部 非臨床開発部
理事 (非常勤)	岡 部 繁 男	理化学研究所 脳神経科学研究センター センター長
	長 田 裕 之	(公財)微生物化学研究会・微生物化学研究所 特任部長
	佐 々 義 子	日本バイオ技術教育学会 理事
	高 山 誠 司	東京大学 名誉教授
	中 西 友 子	東京大学大学院農学生命科学研究科 特任教授 東京大学 名誉教授
	藤本 ゆかり	慶應義塾大学 理工学部 教授
	吉 田 稔	理化学研究所 理事 東京大学 特別教授

監 事

監事 (非常勤)	柴 毅	公認会計士 柴 毅 事務所 公認会計士
	加賀美 弘明	監査法人 A&A パートナース パートナー

評議員

評議員会長 (非常勤)	江 崎 信 芳	京都大学 名誉教授
評議員 (非常勤)	浅 見 忠 男	横浜市立大学木原生物学研究所 特任教授
	木 野 邦 器	早稲田大学 名誉教授
	五 味 勝 也	東北大学大学院農学研究科 名誉教授
	柴 田 健 志	協和キリン(株) 取締役 常勤監査等委員
	反 町 典 子	東京大学大学院理学系研究科 教授
	宮 島 篤	東京大学定量生命科学研究科 特任教授 東京大学 名誉教授
	山 本 一 彦	理化学研究所 生命医科学研究センター チームディレクター

名誉理事

(2026 年 6 月 5 日現在)

名誉理事	伊 藤 醇	公認会計士
	大 塚 榮 子	産業技術総合研究所 名誉フェロー 北海道大学 名誉教授
	大 村 智	北里大学大村智記念研究所 特別名誉教授 北里大学 特別名誉教授
	香 川 靖 雄	日本栄養大学 副学長・栄養科学研究所長 自治医科大学 名誉教授、客員教授
	垣 添 忠 生	(公財)日本対がん協会 会長 国立がんセンター 元総長
	勝 木 元 也	基礎生物学研究所 名誉教授
	岸 本 忠 三	大阪大学免疫学フロンティア研究センター 特任教授 千里ライフサイエンス振興財団 名誉理事長
	北 原 武	東京大学 名誉教授 北里大学 客員教授
	木 村 光	京都大学 名誉教授 (株)グリーンバイオ 代表取締役
	郷 通 子	長浜バイオ大学 特別客員教授
	榊 佳 之	(学)静岡雙葉学園 特別顧問
	高 津 聖 志	東京大学 名誉教授
	谷 口 維 紹	東京大学先端科学技術研究センター フェロー 東京大学 名誉教授
	長 澤 寛 道	東京大学 名誉教授
	樋 口 節 夫	樋口節夫公認会計士事務所 公認会計士
	平 田 正	元 協和発酵工業(株) 会長
	福 山 透	東京大学 名誉教授
	松 田 譲	元 協和発酵キリン(株) 社長
	三 品 昌 美	東京大学 名誉教授
	柳 田 敏 雄	大阪大学 名誉教授

選考委員

(2026 年 4 月 1 日現在)

選考委員長	葛 山 智 久	東京大学大学院農学生命科学研究科 教授
選考副委員長	藤 尾 圭 志	東京大学大学院医学系研究科 教授
選考委員	上 杉 志 成	京都大学 化学研究所 教授
	大 塚 基 之	岡山大学 学術研究院 医歯薬学域 教授
	尾 畑 やよい	東京農業大学 生命科学部 教授
	菅 波 孝 祥	名古屋大学 環境医学研究所 教授
	田 口 英 樹	東京科学大学 総合研究院 細胞制御工学研究センター 教授
	竹 内 理	京都大学大学院医学研究科 教授
	武 田 憲 彦	東京大学大学院医学系研究科 教授
	藤 間 祥 子	奈良先端科学技術大学院大学 先端科学技術研究科 准教授
	豊 島 文 子	東京科学大学 総合研究院 難治疾患研究所 教授
	中 嶋 正 敏	東京大学大学院農学生命科学研究科 教授
	林 香	慶應義塾大学 医学部 教授
	日 比 正 彦	名古屋大学大学院理学研究科 教授
	政 井 英 司	長岡技術科学大学 技学研究院 教授
	松 浦 友 亮	東京科学大学 未来社会創成研究院 地球生命研究所 教授
	村松 里衣子	国立精神・神経医療研究センター 神経研究所 神経薬理研究部 部長

Ⅲ．助成者からの報告

1. 第 35 回研究助成報告（研究期間：2024 年 4 月～2026 年 3 月）

当財団では、助成対象となった 2 年間の研究期間終了時に成果報告を受けている。

本年は第 35 回（2023 年度）研究助成受領者（以下、助成者）が報告対象である。

また、諸般の事情により助成期間を延長していた第 33 回助成者の 1 名は、今回に含めて掲載している。

以下に助成者の名簿ならびに報告書を掲載する（所属は報告書記載の通り）。

第 35 回研究助成者一覧

（1）メディカルサイエンス分野（18 名）

氏名	所属機関	職名	研究題目	ページ
新井 絢也	朝日生命成人病研究所 附属医院 消化器内科	主任 研究員	EB ウイルス関連胃癌モデルマウスの解析	40
池田 幸樹	京都大学 高等研究院 物質-細胞統合システム拠点	特定 拠点 助教	不妊症治療を目指した細胞接着活性化剤の 開発	42
内田 康雄	広島大学 大学院医系科学研究科 分子システム薬剤学	教授	血液脳関門の機能制御に基づく脳梗塞の革 新的治療戦略	44
※ 岡崎 朋彦	北海道大学 遺伝子病制御研究所 分子細胞生物研究室	准教授	疾患治療への応用を志向した細胞内カルボ キシル化修飾機構の解明	46
川上 竜司	京都大学医生物学研究所 生体再建学分野	特定 助教	プログラム細胞死と制御性 T 細胞分化の 細胞運命を仕分ける分子メカニズムの解明	48
河本 新平	東北大学加齢医学研究所 加齢生物学分野	教授	腸内細菌による B 細胞老化誘導機構の解明	50
木谷 友哉	京都府立医科大学 大学院医学研究科 循環器内科学	助教	心筋細胞脱分化機構の解明と細胞増殖促進 法の開発	52
小林 央	東北大学大学院医学系研究科 幹細胞医学分野	准教授	造血幹細胞の再入眠機構の解明と遺伝子編 集技術への応用	54
笹澤 有紀子	順天堂大学 大学院医学研究科 老人性疾患病態・治療研究 センター	准教授	脂肪滴分解を介した新しいタンパク質分解 機構の解明	56
高岸 麻紀	名古屋市立大学 大学院薬学研究科 病態生化学分野	講師	運動性多繊毛による脳室内シグナル伝達機 構の解明	58
長崎 謙慈	大阪公立大学 大学院医学研究科 血液腫瘍制御学	講師	CD4 陽性 T 細胞の空間解析に基づく腫瘍微 小環境の本態解明	60

氏名	所属機関	職名	研究題目	ページ
羽澤 勝治	金沢大学・新学術創成研究機構 セルバイオノミクスユニット	准教授	細胞核老化の理解と制御	62
※ 阪東 勇輝	島根大学医学部解剖学講座 (神経科学)	准教授	ミトコンドリア機能から紐解く自閉スペクトラム症発症機構	64
古山 貴文	金沢医科大学 医学部 生理学 1	講師	注意欠陥多動性障害の発症に関わる神経機構の解明	66
平島 一輝	徳島大学フォトニクス健康フロンティア研究院栄養代謝シグナル学ユニット	准教授	新規代謝阻害剤によるミトコンドリアー翻訳後修飾軸を介する転移阻害メカニズムの解明	68
諸石 寿朗	東京科学大学 難治疾患研究所 細胞動態学分野	教授	鉄動態の変容と生理・病理現象の連関解明	70
渡邊 美佳	北海道大学病院 皮膚科	講師	皮膚広域発癌の制圧を目指した幹細胞における創傷記憶成立起源の同定	72
向山 順子	東京大学医科学研究所 外科	助教	CDX2 低発現大腸癌の細胞起源に基づく新規治療法の開発	74

※優秀賞

(2) バイオテクノロジー分野 (8 名)

氏名	所属機関	職名	研究題目	ページ
伊藤 太一	九州大学基幹教育院 自然科学実験系部門	准教授	新規スクリーニング法による睡眠改善効果を有する天然化合物の探索	76
馬谷 千恵	東京農工大学 大学院農学研究院 応用生命化学部門	助教	発達状態依存的な摂食量増加の神経メカニズム	78
椎森 仁美	奈良先端科学技術大学院大学 先端科学技術研究科 RNA 分子医科学研究室	助教	ウイルス防御におけるマダニ RNA 切断酵素 Dicer 様タンパク質の機能解析	80
四方 明格	自然科学研究機構 基礎生物学研究所 植物環境応答研究部門	助教	機械刺激応答を介した植物の細胞極性形成・維持機構の解明	82
高田 紘翠	大阪公立大学 大学院農学研究科 発酵制御化学研究グループ	助教	宿主-腸内細菌共生の新たな意義: ムチン分解による宿主エネルギー代謝制御機構の解明	84
田中 若奈	広島大学 大学院統合生命科学研究科 食品生命科学プログラム	准教授	イネ幹細胞の低温応答メカニズムの解明	86
堀 千明	北海道大学 大学院地球環境科学研究院 環境生物科学部門 環境分子生物学分野	教授	樹木保護を目指した樹木-寄生菌の相互作用解析	88
矢崎 亮	九州大学高等研究院	准教授	非天然アミノ酸が拓く細胞内 PPI 標的中分子ペプチド創成	90

(3) 環境バイオ分野 (3名)

氏名	所属機関	職名	研究題目	ページ
神保 晴彦	埼玉大学 大学院理工学研究科 生命科学専攻	助教	細胞外脂質を介した環境炭素循環経路の解明	92
田原 進也	東北大学 大学院薬学研究科 分子薬科学専攻 生物構造化学分野	助教	液-液相分離を用いたプラスチックやバイオマスの高効率分解	94
前田 海成	東京科学大学 総合研究院 化学生命科学研究所	助教	海洋性藍藻における硫酸多糖の合成制御機構と機能の解析	96

■M1

研究題目 EB ウイルス関連胃癌モデルマウスの解析
氏名 新井 絢也
所属 朝日生命成人病研究所付属医院 ・ 主任研究員

生活習慣病対策が進む中でも悪性新生物は増加し、胃癌は依然として主要な死因の一つである。胃癌の主な原因はピロリ菌だが、近年ピロリ菌以外の胃癌関連因子が注目されており、その中に EB ウイルス、EB ウイルス関連胃癌がある。このタイプの胃癌は ARID1A、PIK2 CA 遺伝子変異を高頻度に有するが、その詳細な発癌メカニズムは分かっていない。本研究では胃特異的 ARID1A 欠損マウスを作製し、PIK3CA 変異との相乗効果により発癌が促進されることを確認した。さらに Bulk/Single cell RNA-seq 解析により ICOS+ II 型自然リンパ球の増加を認め、その誘因として、胃上皮からの IL33 発現亢進を認めた。ICOS 抗体による ILC2 除去や IL33 中和抗体投与により腫瘍縮小と細胞増殖抑制を認めた。以上より、ARID1A 変異は IL33/ICOS 軸を介した II 型免疫活性化を通じて腫瘍形成・進展に寄与し、新規治療標的となり得る可能性が示された。

■M2

研究題目 不妊症治療を目指した細胞接着活性化剤の開発
氏名 池田 幸樹
所属 京都大学高等研究院 物質-細胞統合システム拠点 ・ 特定拠点助教

近年のキャリア形成多様化に伴う出産高齢化により、不妊治療の需要が急速に高まっている。2022 年の保険適用開始もあり、生殖補助医療は大きな注目を集めるが、胚移植後の着床障害に対する有効な治療法は未だ確立されていない。本プロジェクトでは、着床の要となる分子「インテグリン」による細胞接着に着目し、その活性化を促す新規薬剤の開発に取り組んだ。

in vitro アッセイやマウスモデルを用いた試験の結果、開発薬剤が細胞接着を顕著に増強し、着床に対して高い有効性と安全性を持つことを実証した。さらに、不妊症患者の解析から加齢によるインテグリン発現低下を確認しており、本剤が加齢に伴う着床率低下の解決策となる可能性を強く示唆している。今後はヒト胚への適用に加え、種を超えて保存された接着メカニズムを活かし、畜産効率化や絶滅危惧種の繁殖支援など、動物医療分野への応用展開も目指す方針である。

■M3

研究題目 血液脳関門の機能制御に基づく脳梗塞の革新的治療戦略
氏名 内田 康雄
所属 広島大学大学院医系科学研究科 分子システム薬剤学 ・ 教授

血液脳関門（BBB）の機能は、中枢疾患の発症・進行に伴ってダイナミックに変化することから、効果的な中枢疾患治療を考える上で、この BBB の病態変動機構を考慮することは重要である。P 糖タンパク質(P-gp)は、最も代表的なトランスポーターのひとつである。酸化ストレスは多くの中枢疾患で共通する病態であるが、その急性期では P-gp の輸送活性は発現量変化なしに低下し、血中グルココルチコイドの脳移行が促進されることを解明した。この P-gp 機能低下は、Abl kinase や Src kinase の活性化によって生じることをリン酸化プロテオミクスで明らかにした。これらの阻害剤を投与することによって、グルココルチコイドの過剰な脳移行を制限でき、脳梗塞に伴う脳機能障害を低減できることを実証した。BBB 機能の病態変動の分子機構に基づく“中枢関門創薬”は、中枢疾患治療薬の開発において新たな戦略になると考える。

■M4

研究題目 疾患治療への応用を志向した細胞内カルボキシル化修飾機構の解明
氏名 岡崎 朋彦
所属 北海道大学遺伝子病制御研究所 分子細胞生物研究室 ・ 准教授
Suntory Rising Stars Encouragement Program in Life Sciences
(SunRISE) Fellow

本研究では、ビタミン K 依存性カルボキシラーゼ（GGCX）が、ストレス応答時にその膜トポロジを反転させ、細胞質タンパク質をカルボキシル化（Gla 化）するという新規現象の解明に取り組んだ。

研究の結果、独自のゲノムワイドスクリーニング系を構築し、GGCX の反転制御因子の網羅的探索を可能にした。また、RNA ウイルス認識経路の下流において、p38 MAPK 経路の活性化が GGCX のトポロジ反転を誘導する重要なトリガーであることを突き止めた。さらに、脳組織を用いた質量分析により、複数の新規細胞内 Gla 化基質を同定した。特に DNA 修復に関わる特定のタンパク質に着目し、その特異的修飾認識抗体の作製に成功した。

本成果は、細胞内 Gla 化修飾が自然免疫やゲノム安定性維持を横断的に制御する「ストレス応答ハブ」として機能する可能性を示すものであり、将来的ながんや感染症の新たな治療戦略構築に寄与するものである。

■M5

研究題目 プログラム細胞死と制御性 T 細胞分化の細胞運命を仕分ける
分子メカニズムの解明

氏名 川上 竜司

所属 京都大学医生物学研究所 特定助教

免疫系は胸腺における T 細胞のクローン選択により自己免疫寛容を維持している。未熟 T 細胞は自己抗原刺激の強度に応じて、アポトーシス細胞死または制御性 T 細胞 (Treg) への分化という異なる運命をとるが、この分岐を規定する分子メカニズムは十分に解明されていなかった。本研究では、抗原刺激を受けた未熟 T 細胞の中に、アポトーシス誘導能と Treg 分化能を併せ持つ新たな分化段階を同定した。さらに、アポトーシス阻害モデルおよび単一 TCR モデルを用いた解析により、細胞死と Treg 分化の運命分岐はアポトーシス実行以前の段階で規定される可能性を示した。また、このような分岐を特徴づける分子の同定と、その誘導が T 細胞受容体刺激に依存することを明らかにした。これらの知見は、免疫寛容誘導機構の理解を深め、Treg を基盤とした疾患病態の解明に貢献することが期待される。

■M6

研究題目 腸内細菌による B 細胞老化誘導機構の解明

氏名 河本 新平

所属 東北大学加齢医学研究所 ・ 教授

本研究は、腸管粘膜で知られる「細菌依存的な B 細胞老化」が口腔免疫系でも共通するかを検証し、粘膜面における免疫老化の普遍的原理の解明を目的とした。

解析の結果、頸部リンパ節の胚中心 B 細胞が加齢に伴い顕著に細胞老化を起こすことを突き止めた。腸管とは異なり、口腔での老化誘導は無菌マウスでも進行し、内因性レトロウイルスの活性化等が関与する組織特異的な機序が示唆された。この B 細胞老化に連動して唾液中 IgA の量と質が低下し、若齢期に優勢な *Staphylococcus nepalensis* の激減を伴う口腔細菌叢の乱れが惹起されることを同一個体の長期追跡により確認した。さらに老化抑制型 B 細胞の移植実験により、B 細胞老化が細菌叢変容の直接的な原因であることを証明した。本成果は、粘膜面での B 細胞老化が IgA 低下を介して細菌叢の恒常性を崩壊させる共通の駆動源であることを示す新概念であり、老化や全身疾患予防に向けた新たな標的を提示した。

■M7

研究題目 心筋細胞脱分化機構の解明と細胞増殖促進法の開発
氏名 木谷 友哉
所属 京都府立医科大学大学院医学研究科循環器内科学 ・ 助教

本研究は、ヒト心筋細胞の脱分化制御機構を解明し、心筋細胞増殖を利用した新たな心臓再生治療の基盤構築を目的とした。ヒト多能性幹細胞由来心筋細胞を用い、低密度かつ Wnt シグナル活性化条件下で継続的な増殖と高純度の心筋細胞集団の維持を確認した。さらに、Brunello ライブラリーを用いた全ゲノム CRISPR ノックアウトスクリーニングを 4 回独立に実施し、細胞増殖に必須な遺伝子群と、ノックアウトにより増殖が促進される候補遺伝子群を同定した。Negative ranking では蛋白質合成関連経路が強く濃縮され、Positive ranking では TP53 が最上位となり、スクリーニングの妥当性が示された。今後は候補遺伝子ノックアウト心筋細胞の形態、遺伝子発現、収縮能を解析し、脱分化誘導に基づく心不全治療への応用可能性を検証する。

■M8

研究題目 造血幹細胞の再入眠機構の解明と遺伝子編集技術への応用
氏名 小林 央
所属 東北大学大学院医学系研究科 ・ 准教授

造血幹細胞（HSC）は造血ストレス後に活性化したのち、造血系再構築を担った後に再び静止期へ戻る「再入眠」を示すが、その分子機構は未解明である。本研究では、増殖刺激後の HSC を静止期培養条件に戻すことで G0 分画が増加し、活性化 HSC が再入眠可能であることを示した。さらに、同条件は HDR 遺伝子編集後 HSC においても細胞周期関連遺伝子の抑制と幹細胞分画の維持に有利に働き、遺伝子編集に伴う機能低下を軽減しうることを示された。再入眠関連分子として Ctsf に着目し、欠損マウス解析から二次移植後 T 細胞再構築能低下、5-FU 後血小板回復促進を認めたことから Ctsf は再入眠時の分化方向と機能維持に関与すると考えられた。さらに Ctsf 欠損ではミトコンドリア蛋白増加と mitophagy 低下もみられ、Ctsf がミトコンドリア恒常性を介して HSC の機能維持と分化制御に関与し、遺伝子編集後 HSC 機能改善の標的となる可能性が示唆された。

■M9

研究題目 脂肪滴分解を介した新しいタンパク質分解機構の解明
氏名 笹澤 有紀子
所属 順天堂大学大学院老人性疾患病態・治療研究センター ・ 准教授

パーキンソン病（PD）は、脳内のタンパク質凝集を特徴とする難病であり、根本的な治療法の確立が急務である。本研究では、独自に開発した小分子化合物 A の解析を通じて、PD 病態における「脂肪滴」の重要性を明らかにした。

超解像顕微鏡観察により、PD モデル細胞では脂肪滴が異常蓄積することを見出した。詳細な解析の結果、化合物 A は特定のタンパク質に結合し、その酵素活性を阻害することで脂質不飽和化反応を遮断し、脂肪滴の形成を強力に抑制することを突き止めた。さらにリピドーム解析により、細胞内の不飽和度の高い脂肪酸が減少することを確認した。

本成果は、酸化ストレスの標的となる不飽和脂質の供給を制限することで、鉄依存性細胞死（フェロトーシス）を防ぐ新たな治療戦略を示唆している。脂質代謝を介した恒常性維持という新視点から、PD の革新的な治療薬開発への貢献が期待される。

■M10

研究題目 運動性多繊毛による脳室内シグナル伝達機構の解明
氏名 高岸 麻紀
所属 名古屋市立大学大学院 薬学研究科 ・ 講師

脳脊髄液に満たされた側脳室の組織表面は、運動性多繊毛を有する上皮細胞に覆われている。上皮細胞の間には神経幹細胞の細胞体の一部が入り込み、脳室面に突起を伸長させることで脳脊髄液由来の化学的・機械的シグナルを受容していると考えられる。本研究では、神経発達症患者で同定されたキネシンモータータンパク質 Kif6 の遺伝子変異に起因する繊毛異常および神経幹細胞異常を解析し、繊毛を介した脳室内シグナル伝達機構の解明を目的とした。本研究助成のもと、Kif6 遺伝子変異型上皮細胞の繊毛において減少するタンパク質群のスクリーニングを実施し、Kif が繊毛内へ局在化させるアクチン制御分子を同定した。さらに、電子顕微鏡解析により、Kif6 変異および同定したアクチン制御因子の欠損が繊毛形態に及ぼす影響を明らかにした。これらの成果は、繊毛を起点とする脳室内シグナル伝達機構の解明において極めて重要な知見を提供するものである。

■M11

研究題目 CD4 陽性 T 細胞の空間解析に基づく腫瘍微小環境の本態解明
氏名 長崎 讓慈
所属 大阪公立大学大学院医学研究科 血液腫瘍制御学 ・ 講師
 (旧所属：岡山大学 医歯薬学域 腫瘍微少環境学 ・ 助教)

免疫チェックポイント阻害薬 (ICI)は広く臨床応用されているが、その効果は不十分で腫瘍微小環境 (TME)の本態解明が必要である。TME の抗腫瘍免疫応答の中心は CD8 陽性 T 細胞とされているが、CD4 陽性 T 細胞の TME での役割は未だ十分に解明されていない。我々は TME に浸潤した腫瘍細胞と直接反応する腫瘍特異的 CD8 陽性 T 細胞を正確に同定し、それらが疲弊の表現型を呈することを明らかにした。さらに TME の CD4 陽性 T 細胞に着目し、CD4 陽性 T_{FH}の一部に細胞傷害性を有する細胞障害性 CD4 陽性 T_{FH}様クローンが存在することを新規に同定した。これらのデータに基づいて ISH を用いた独自の手法で患者病理標本上の腫瘍特異的 CD8 陽性 T 細胞の空間的位置を同定し、Visium 空間解析により T_{FH}を含む CD4 陽性 T 細胞の TME での空間分布を同定することに成功した。これらの免疫細胞の空間的位置関係を明らかにすることで、これまで明らかではなかった TME で腫瘍特異的 T 細胞が果たす役割や、他の免疫細胞との相互作用、腫瘍内の TLS での作用などを解明することが可能であり、解析を進めている

■M12

研究題目 細胞核老化の理解と制御
氏名 羽澤 勝治
所属 金沢大学新学術創成研究機構 ・ 准教授

本研究では、機能的な細胞核が長期に維持される仕組みの解明を目的として、核膜孔複合体の寿命解析と長寿核膜孔追跡系の開発を進めた。まず、HCT116 細胞を用いた Cycloheximide アッセイにより核膜孔構成タンパク質の安定性を比較した結果、分解速度には大きな差が認められ、NUP62 が最も不安定であった一方、ELYS が最も安定であることを明らかにした。次に、ELYS を指標として寿命の異なる核膜孔を識別する RITE システムの構築に取り組んだ。初期ベクターでは転写上昇を認めたもののタンパク質発現検出には至らず、反復配列や発現制御上の課題が示された。一方で、piggyBac ベクターへの移行、コドン最適化型カセットの再構築、Cre-ERT2 誘導条件の最適化を進め、改良型追跡系の基盤を整備した。以上より、ELYS を指標とした長寿核膜孔追跡に向けた基礎データと実験基盤を得た。

■M13

研究題目 ミトコンドリア機能から紐解く自閉スペクトラム症発症機構
氏名 阪東 勇輝
所属 島根大学 医学部 解剖学講座(神経科学) ・ 准教授

ミトコンドリアによる細胞内エネルギー供給は神経回路発達に極めて重要である。これまでに、自閉症患者においてミトコンドリア活性の低下が報告されている¹。また、自閉スペクトラム症モデルマウスでは、生後初期における大脳皮質神経回路発達に障害をきたすことが知られている。生後初期発達段階において、ミトコンドリアは、ミトコンドリア近傍の樹状突起・軸索の分枝を促進することで神経回路形成を制御することから、自閉スペクトラム症モデルマウスにおいて、ミトコンドリア異常により神経回路形成異常が生じると予想されるが、詳細は明らかではない。これを明らかにするため、生体脳の非侵襲的にミトコンドリア機能を評価するための蛍光膜電位プローブ、mtArcLight-ST の開発を行った。mtArcLight-ST は神経細胞ミトコンドリアに局在し、膜電位プローブとして機能することを示した。

■M14

研究題目 注意欠陥多動性障害の発症に関わる神経機構の解明
氏名 古山 貴文
所属 金沢医科大学 医学部 生理学 1 ・ 講師

本研究は、ADHD の病態解明と治療法確立のため、ADHD モデル動物の作製と神経動態の解明を目的とした。胎生期から離乳までニコチンを暴露したマウスを ADHD モデル動物とし、行動評価と神経計測環境の構築を行った。行動実験の結果、ニコチン暴露群は対照群に比べ自発行動量が増加し、崖回避テストでは落下までの時間が短縮する傾向を示した。これは ADHD の症状である多動性や衝動性を反映しており、モデル動物の妥当性があると考えられる。また、ファイバーフォトメトリー法を用い、神経活動（カルシウム）とドーパミン濃度の同時計測系を構築した。この実験では、音刺激に対し前帯状回（ACC）と側坐核（NAc）で異なるドーパミン動態が確認され、部位特異的な反応の計測に成功した。今後はこの計測系をモデル動物に適用し、ドーパミン濃度と行動変容の因果関係を解明することで、ADHD 発症の生物学的知見や精神刺激薬の作用機序の理解、新薬開発への貢献を目指す。

■M15

研究題目 新規代謝阻害剤によるミトコンドリア-翻訳後修飾軸を介する
転移阻害メカニズムの解明

氏名 平島 一輝

所属 徳島大学 フォトニクス健康フロンティア研究院 ・ 准教授

近年、がんの特徴的なミトコンドリア関連代謝が転移に重要であることが指摘され、注目を集めている。本研究では、ミトコンドリア関連代謝を強力に阻害し、転移抑制効果を持つ新規阻害剤の分子機構解明のため、PTM プロテオーム解析を行った。その結果、細胞接着制御に重要である分子の特定部位における翻訳後修飾が変動し、当該部位の翻訳後修飾が腫瘍細胞の接着状態を制御していることを同定した。さらに、マウス転移モデルの *in vivo* 腫瘍組織において当該翻訳後修飾の状態を免疫染色で確認したところ、転移組織での発現亢進を確認した。以上より、本研究によって同定された翻訳後修飾はがんの転移制御に関与している可能性が高く、新たな治療標的となる可能性が示唆された。

■M16

研究題目 鉄動態の変容と生理・病理現象の連関解明

氏名 諸石 寿朗

所属 東京科学大学 総合研究院難治疾患研究所 ・ 教授
(旧所属 : 熊本大学 大学院生命科学研究部 ・ 教授)

本研究では、鉄感知分子 FBXL5 の特性を利用した蛍光レポーターを導入した鉄レポーターマウスを開発し、生体内における遊離鉄動態を単一細胞レベルで可視化する新規手法を確立した。これにより、同一組織内にも細胞種特異的な鉄分布の不均一性が存在することを明らかにした。さらに、鉄過剰がフェロトーシスを介して肝虚血再灌流障害や新生児胆汁うっ滞性肝障害を増悪させる一方、成体では好中球を介した線維溶解促進により線維化を抑制するなど、病態や時期に応じた鉄の二面的役割を解明した。これらの成果は、鉄動態に基づく肝疾患の包括的理解を深化させるとともに、新規治療戦略の構築に向けた基盤的知見を提供するものである。

■M17

研究題目 皮膚広域発癌の制圧を目指した幹細胞における創傷記憶成立起源の同定
氏名 渡邊 美佳
所属 北海道大学病院 皮膚科 ・ 講師

表皮幹細胞における「創傷記憶（オープンクロマチン）」は、創傷部位だけでなく周囲の正常組織にも伝播し、広域発癌（field cancerization）を惹起する要因となる。本研究では、この創傷記憶が幹細胞の遺伝子変異や発癌プロセスに与える影響を、モデルマウスとヒト検体を用いて網羅的に解析することを目的とした。

マウスモデルの検討では、全層損傷に比べ表皮のみの損傷（吸引水疱）は発癌しにくいことが判明した。また、薬剤を用いた高発癌モデルの樹立を試みたが、予想に反し発癌抑制効果が認められた。ヒト検体の解析では、皮膚扁平上皮癌（SCC）および前癌病変において、正常皮膚と比較し閉鎖クロマチンマーカーの染色性が低く、クロマチンがより開いた状態にあることが示唆された。今後は幹細胞系譜別の全エキソーム解析、空間的トランスクリプトーム、ATAC-seq を統合解析し、創傷記憶に伴う遺伝子変異と広域発癌の関連を詳細に解明する。

■M18

研究題目 CDX2 低発現大腸癌の細胞起源に基づく新規治療法の開発
氏名 向山 順子
所属 東京大学医科学研究所外科 ・ 助教

大腸癌には多様な分子サブタイプが存在し、CDX2 低発現大腸癌は早期病期でも再発率が高く、予後不良である。本研究では、その腫瘍生物学的特徴を明らかにするため、CDX2 発現低下が癌関連マイクロ RNA に及ぼす影響と、新規血中バイオマーカーを検討した。ヒト大腸癌細胞株 HCT116 に CDX2 siRNA を導入したところ、複数の癌関連マイクロ RNA が増加し、特に miR-221 が有意に上昇した。TCGA データの解析でも、CDX2 と miR-221 の発現には有意な逆相関を認めた。さらに、右側大腸癌患者の術前血漿を解析した結果、CDX2 低発現大腸癌では CEACAM1 が低値であった。CDX2 の発現低下は miR-221 を介して悪性形質に関与するとともに、特徴的な細胞表面分子プロファイルを形成することが示された。

■B1

研究題目 新規スクリーニング法による睡眠改善効果を有する天然化合物の探索
氏名 伊藤 太一
所属 九州大学基幹教育院自然科学実験系部門 ・ 准教授

本研究では、刺胞動物ヒドラを用いた新規表現型スクリーニング系を構築し、700 種以上の天然化合物を対象に睡眠制御効果の網羅的解析を実施した。ヒドラは単純な体構造と高い化合物透過性を兼ね備えており、生きた試験管として個体レベルでの高効率かつ高再現性な評価が可能である。本スクリーニングの結果、再現性高く睡眠量および睡眠構造を変化させる天然化合物を同定した。本化合物は暗期における睡眠量の増加に加え、睡眠回数の減少および平均睡眠持続時間の延長を誘導し、睡眠の量的・質的双方に影響を及ぼすことが明らかとなった。さらにショウジョウバエにおいても類似の効果が確認され、種を超えて保存された睡眠制御機構に作用する可能性が示唆された。本研究により、ヒドラを用いた高効率スクリーニング法の有用性が実証されるとともに、新規睡眠制御因子の同定および医薬品・食品分野におけるシーズ創出に向けた基盤が確立された。

■B2

研究題目 発達状態依存的な摂食量増加の神経メカニズム
氏名 馬谷 千恵
所属 東京農工大学大学院農学研究院 ・ 助教

動物において食べることは生存に必須であり、繁殖状態や空腹状態など生理状態に応じて適切な量の食事を摂取することは重要である。経験的に、発達が進むにつれて、摂食量が増加することは明らかとなっているが、発達の程度に応じて適切に摂食量を制御するメカニズムについては不明な点が多く残されている。特に、魚類においては、摂食に応じた脳内の神経ペプチドの発現変動や、それら神経ペプチドを脳の脳室という領域に投与した実験にとどまっており、摂食量制御の体系的な理解が進んでいない。本研究は、遺伝子工学的手法や生理学的手法が適用可能なメダカを用いて、成長に関わるホルモンが摂食関連ペプチドニューロンに作用する機構を糸口に「発達状態をどのように脳で検知し、最終的に摂食量の変動を引き起こすのか」を解明することを目的とした。そして、成長に関わるホルモンが摂食関連ペプチドニューロンに作用する可能性が示唆された。

■B3

研究題目 ウイルス防御におけるマダニ RNA 切断酵素 Dicer 様タンパク質の機能解析
氏名 椎森 仁美
所属 奈良先端科学技術大学院大学先端科学技術研究科 ・ 助教

ウイルス媒介節足動物であるマダニにおいて、小分子 RNA 経路が主要なウイルス防御機構として機能する。小分子 RNA 経路において、RNaseIII型酵素である Dicer が内在小分子 RNA 前駆体や外来・ウイルス二本鎖 RNA を切断し小分子 RNA が産生される。マダニは、2 つの典型的な Dicer に加え、RNaseIIIドメイン1 つのみを持つ Dicer-like protein (DCL) を持つことを見出した。本研究から、マダニ細胞において、二本鎖 RNA のプロセシング活性の検出法を確立した。また、DCL が典型的 Dicer と相互作用し、ウイルス制御において協調して機能することが示唆された。一方で、DCL や典型的 Dicer の単独のノックダウンでは小分子 RNA の産生量の低下は見られるものの、サイズ分布に大きな変化は見られなかったことから、これらの因子が重複した役割を持つ可能性が考えられる。今後、DCL によるウイルス制御のより詳細な分子機構を明らかにしたい。

■B4

研究題目 機械刺激応答を介した植物の細胞極性形成・維持機構の解明
氏名 四方 明格
所属 自然科学研究機構基礎生物学研究所 ・ 助教

植物の器官成長には、細胞レベルでの成長制御が不可欠であり、個々の細胞がもつ方向性の情報（細胞極性）が利用される。本研究では、細胞極性が外部の機械刺激（力学刺激）に応じて制御される分子メカニズムの解明を目的とした。モデルとして、極性成長を行う根毛細胞に着目し、障害物と物理的に接触させ、その応答を可視化するマイクロデバイスを活用した実験を行った。その結果、根毛が障害物と接触した際、接触部位の細胞膜上で迅速かつ局所的なリン脂質組成の変化が生じることを見出した。この変化を担う分子を特定するため、リン脂質代謝に関連する酵素群を解析したところ、特定の酵素タンパク質が機械刺激に応答して接触部位へ局在化することを発見した。本酵素の過剰発現は根毛成長を著しく阻害することから、力学状態に応じた適切なリン脂質代謝が極性成長に必須であると言える。本成果は、機械刺激が脂質シグナリングを介して細胞極性の再構築を導く初期過程の一端を明らかにしたものである。

■B5

研究題目 宿主-腸内細菌共生の新たな意義：
ムチン分解による宿主エネルギー代謝制御機構の解明
氏名 高田 紘翠
所属 大阪公立大学大学院農学研究科 ・ 助教

腸内細菌が産生する短鎖脂肪酸は宿主のエネルギー代謝を制御することが知られているが、宿主由来ムチンを基質とした発酵の役割は十分に解明されていない。本研究では、ムチン資化性菌である *Bifidobacterium bifidum* をモデルに、ムチン糖鎖分解が短鎖脂肪酸産生と宿主代謝へ及ぼす影響を、*in vitro* および *in vivo* で解析した。ムチン糖鎖分解酵素欠損株を作製し解析した結果、増殖能は野生株と同等であったが、ムチン糖鎖の分解が低下し、遊離単糖量も減少した。また、分解物利用菌との共培養では、野生株では短鎖脂肪酸産生が認められた一方、欠損株では抑制された。無菌マウスでは野生株・欠損株とも同程度に定着したが、産生された短鎖脂肪酸量はGタンパク質共役型受容体GPR41・GPR43を活性化するには不十分であった。これは無菌マウスのムチン層が薄く、基質量が不足していたためと考えられ、今後は抗生物質処理マウスやムチン糖鎖投与モデルでの検証が必要である。

■B6

研究題目 イネ幹細胞の低温応答メカニズムの解明
氏名 田中 若奈
所属 広島大学大学院統合生命科学研究科 ・ 准教授

夏場の気温低下（低温）は、イネの収量に直結する花の形態形成に影響を及ぼし、収量や品質に深刻な被害（冷害）をもたらす。これまでの研究により、低温によって生じる花の形態異常は、花分裂組織（花器官を生み出す幹細胞組織）の異常に起因する可能性が示唆されていた。本研究では、低温に応答した花分裂組織の制御機構と、それらが花の形態形成にどのようにつながっているのかを分子レベルで解明することを目的とした。

形態観察の結果、低温が多面的な花の形態異常を引き起こすことが示唆された。さらに発生学的解析により、低温が花分裂組織活性の低下を引き起こすことを明らかにした。加えて、トランスクリプトーム解析および遺伝学的解析から、低温は複数の植物ホルモン生合成・シグナル伝達系に影響を及ぼすことが示された。

以上から、低温は複数の植物ホルモン生合成・シグナル伝達系の異常を引き起こし、それが花分裂組織活性の低下・花器官分化の異常を介して、多面的な花の形態異常につながる可能性が示唆された。

■B7

研究題目 樹木保護を目指した樹木-寄生菌の相互作用解析
氏名 堀 千明
所属 北海道大学大学院 地球環境科学研究所 ・ 教授

広葉樹の病原性腐朽菌ベッコウタケ (*Perenniporia fraxinea*) は、立木に感染して根腐れによる倒木を引き起こす。しかし、本菌がどのように樹木の防御機構に打ち勝っているのかは明らかになっていない。そこで本研究では、本病原菌と感受性の高い広葉樹ニセアカシヤ (*Robinia pseudoacacia*) が傷害や微生物に応答して形成する反応帯組織 (RZ) における防御物質を解析した。その結果、加水分解性タンニン (HT) が RZ の主要成分であり、本成分が腐朽菌の菌糸成長を著しく阻害することが明らかになった。興味深いことに、*P. fraxinea* は、非病原性の木材腐朽菌よりも、RZ 粗抽出物および HT に対する耐性が高いことが示された。さらに、*P. fraxinea* が分泌する酵素によって樹木防御物質の無毒化が生じる分子メカニズムを解明した。

■B8

研究題目 非天然アミノ酸が拓く細胞内 PPI 標的中分子ペプチド創成
氏名 矢崎 亮
所属 九州大学高等研究院 ・ 准教授

タンパク質間相互作用 (PPI) は広く平坦な界面で形成されるため、従来の低分子化合物では制御が困難であり、細胞内で機能する新たな創薬モダリティの開発が求められている。本研究では、嵩高い非天然アミノ酸を導入した中分子ペプチドにより、PPI 阻害活性と細胞膜透過性の両立を目指した。まず、分子間 SET を活用することで、従来必要であった銅触媒を用いない実用的な非天然アミノ酸合成法を開発し、グラムスケールでの合成を可能とした。次に、MDM2/p53 相互作用に着目し、結合に重要なアミノ酸残基を非天然アミノ酸へ置換した結果、ヘリックス構造の安定化と結合親和性の向上を達成した。X 線結晶構造解析により、非天然アミノ酸が疎水ポケットを効果的に占有しつつ構造を安定化することを明らかにした。加えて、さらなる活性向上を目的として複数箇所への導入を検討した結果、非天然アミノ酸を複数導入したペプチドが最も高い細胞内 PPI 阻害活性を示すことを見出した。

■E1

研究題目 細胞外脂質を介した環境炭素循環経路の解明
氏名 神保 晴彦
所属 埼玉大学大学院理工学研究科 ・ 助教

地球上の多くの炭素資源は、光合成生物の物質生産に支えられている。シアノバクテリアや他の光合成微細藻類によって固定された炭素の一部は、脂肪酸合成へ利用され、生態系の他の微生物や動物の生存を支える糧となる。我々は、光合成生物が合成した不飽和脂肪酸が、他の微生物に利用されることが、生態の炭素代謝に重要な働きを担うと考え、本研究では、環境中の微生物間による炭素循環への影響について明らかにすることを目的とした。海水濾過フィルターサンプルにおける脂質分子の同定、及び脂質分子に含まれる同位体比の定量を行っところ、特定の時期において、特定の不飽和脂肪酸分子の蓄積及びその同位体比の上昇が観察された。一方、この分子の同位体比の上昇が観察されなかった年においては、藻類などの一次生産者の増加が遅延した。この年には、生態系上位の動物の生存に影響を与えた。以上のことから、微生物生態系における脂肪酸の伝播は、微細藻類の増加やそれを捕食する動物の生産性に影響を与える可能性がある。

■E2

研究題目 液-液相分離を用いたプラスチックやバイオマスの高効率分解
氏名 田原 進也
所属 東北大学大学院薬学研究科 ・ 助教

ポリエチレンテレフタレートや樹木由来ポリマーのリグニンは、難分解性物質である。これらの分解酵素が発見され、変異導入による改良が試みられてきたが、産業応用に十分な効率は未達成である。本研究では液-液相分離（LLPS）を用いて任意酵素を液滴内に濃縮する技術を開発し、酵素反応効率を向上させる手法を確立した。ビオチン化した Pbp1 の LLPS 液滴を調製し、アビジン-ビオチン相互作用を介してビオチン化した EGFP、RNase、リゾチーム、リグニン分解酵素ラッカーゼを液滴内部に濃縮することができた。この結果から、任意酵素の液滴の調製方法が確立された。さらにラッカーゼを濃縮した液滴によるリグニン分解の仲介分子 ABTS のラジカル化反応の効率をミカエリス-メンテンモデルに基づき評価した。その結果、ラッカーゼ均一溶液における反応に比べて k_{cat}/K_m が 1.3 倍向上し、本手法が酵素反応効率を向上させるのに有用であることが示された。

■E3

研究題目 海洋性藍藻における硫酸多糖の合成制御機構と機能の解析
氏名 前田 海成
所属 東京科学大学 総合研究院 化学生命科学研究所 ・ 助教

藍藻（シアノバクテリア）は地球上の多様な環境に生息する光合成原核生物であり、多くは細胞外多糖を主要構成成分とするバイオフィルムを形成する。バクテリアの中で藍藻に特徴的な多糖である硫酸多糖は、藍藻のバイオフィルム形成や環境適応に関与すると考えられる一方、その実体や合成制御機構には未解明な点が多い。本研究では、光環境応答性を示す海洋性藍藻Xを対象に完全ゲノム解析およびRNA-seq解析を実施し、海洋性藍藻に一般的である複雑な硫酸多糖合成系の同定や機能解明を目指した。その結果、硫酸基転移酵素遺伝子を多数含む複数の多糖合成関連遺伝子クラスターを見いだすとともに、遠赤色光下で特定クラスターに属する糖転移酵素遺伝子および硫酸基転移酵素遺伝子群の発現低下を確認した。これらの結果により、藍藻Xでは光環境に応じて特定の硫酸多糖合成が選択的に制御される可能性が示され、海洋性藍藻における複雑な硫酸多糖利用戦略の理解に資する知見が得られた。

2. 第 37 回国際交流助成報告

国内で実施された研究の成果を、2025 年 4 月から 2026 年 3 月までの期間に、海外で開催される学会等で発表する研究者に対して、渡航費等の助成を行った。以下に助成者の名簿ならびに報告書を掲載する（所属は申請時のもの）。

第 37 回国際交流助成者一覧

上期（14 名）

氏名	所属機関	学会名	開催期間	開催国	ページ
物江 祐弥	大阪大学 大学院薬学研究科 細胞生理学分野	ISEV2025 Annual meeting	2025/4/24 ～4/27	オースト リア	101
山本 晴	東京農工大学 農学府共同獣医学専攻 獣医薬理学研究室	American Association for Cancer Research Annual Meeting 2025	2025/4/25 ～4/30	アメリカ	102
真田 隆広	旭川医科大学 医学部 医学科 臨床医学講座 脳神経外科学講座	2025 ISMRM & ISMRT Annual Meeting & Exhibition (ISMRM 2025)	2025/5/10 ～5/15	アメリカ	103
宗兼 将之	金沢大学 医薬保健研究域薬学系 臨床分析科学	26th International Symposium on Radiopharmaceutical Sciences	2025/5/11 ～5/15	オースト リア	104
浦 朋人	筑波大学 数理物質系 物理工学域 蛋白質学研究室	Biomolecular condensates: From fundamental principles to applications in health and biotech	2025/5/13 ～5/15	デンマーク	105
繁森 弘基	産業技術総合研究所 生命工学領域 バイオメディカル研究部門	Biosensors 2025	2025/5/19 ～5/22	ポルトガル	106
松井 翔	大阪大学 大学院医学系研究科 腎臓内科学	62th ERA (European Renal Association) congress	2025/6/4 ～6/7	オースト リア	107
石橋 朋樹	理化学研究所 生命機能科学研究センター フィジカルバイオロジー 研究チーム	Gordon Research Conference “Cell-Cell Junctions: Integrating Cell Signals and Mechanical Force in Development and Disease”	2025/6/7 ～6/13	スイス	108
大野 誠之	大阪大学 大学院歯学研究科 微生物学講座	ASM Microbe	2025/6/19 ～6/23	アメリカ	109
安藤 紗奈	山口大学 大学院共同獣医学研究科 獣医薬理学研究室	EMBO Workshop Phosphatases: from basic research to translation	2025/7/27 ～7/31	ドイツ	110
太田 菜央	兵庫県立人と自然の博物館 自然・環境マネジメント 研究部 生態研究グループ	Congress of the European Society for Evolutionary Biology	2025/8/17 ～8/22	スペイン	111
堤 峻太郎	和歌山県立医科大学 薬学部 病態解析学研究室	21st International Conference on the Cell and Molecular Biology of Chlamydomonas	2025/8/24 ～8/29	ドイツ	112

氏名	所属機関	学会名	開催期間	開催国	ページ
彭 戈	順天堂大学 大学院医学研究科 アトピー疾患研究センター	54th Annual European Society for Dermatological Research Meeting	2025/9/17 ～9/20	フランス	113
矢田部 玲子	東京都立小児総合医療 センター 腎臓・リウマチ膠原病科	32nd European Paediatric Rheumatology Congress	2025/9/17 ～9/20	フィン ランド	114

下期 (22 名)

氏名	所属機関	学会名	開催期間	開催国	ページ
北岡 寛己	東京大学 大学院医学系研究科 生殖・発達・加齢医学専攻	American Society of Human Genetics 2025 Annual Meeting	2025/10/14 ～10/18	アメリカ	115
岩城 翔	名古屋市立大学 大学院医学研究科 耳鼻咽喉・頭頸部外科	ESMO Congress 2025	2025/10/17 ～10/21	ドイツ	116
山本 翔吾	大阪大学 大学院生命機能研究科 鈴木（啓）研究室	Frontiers in Genome Engineering 2025	2025/11/4 ～11/6	中国	117
野林 大幹	東北医科薬科大学 医学部 衛生学・公衆衛生学教室	Kidney week 2025	2025/11/6 ～11/9	アメリカ	118
田村 俊文	北海道大学 大学院医学研究院 循環器内科学教室	AHA Scientific Sessions 2025	2025/11/7 ～11/10	アメリカ	119
梅井 智彦	慶應義塾大学 医学部 循環器内科	AHA Scientific Sessions 2025	2025/11/7 ～11/10	アメリカ	120
高田 春風	徳島大学 大学院医歯薬学研究部 薬物動態制御学分野	Vancouver Nanomedicine Day 2025	2025/11/12	カナダ	121
李 東旻	筑波大学 体育系 運動生化学研究室	Society for Neuroscience	2025/11/15 ～11/19	アメリカ	122
大町 紘平	理化学研究所 生命機能科学研究センター 細胞外環境研究チーム	ASMB 2025 Biennial Meeting	2025/11/16 ～11/19	アメリカ	123
鈴木 龍之介	京都大学 大学院工学研究科 バイオメカニクス分野	13th Asian-Pacific Conference on Biomechanics	2025/11/18 ～11/21	ニュージ ーランド	124
鈴木 秀政	東北大学 大学院生命科学研究科 植物細胞動態分野	EMBO Workshop Plant evolution: from origins to diversification on land	2025/11/25 ～11/27	オースト リア	125
阪村 颯	兵庫県立大学 大学院理学研究科 生命科学専攻 生体物質化学 I 講座	Asia Pacific Drosophila Research Conference 7	2025/11/30 ～12/4	台湾	126
大城 拓未	北里大学 大学院理学研究科 生命物理学講座	The 19th Conference of Asian Crystallographic Association 2025	2025/12/1 ～12/5	台湾	127

氏名	所属機関	学会名	開催期間	開催国	ページ
堤 大洋	日本大学 文理学部化学科 有機合成化学早川研究室	The International Chemical Congress of Pacific Basin Societies 2025 (Pacifichem 2025)	2025/12/15 ～12/20	アメリカ	128
磯崎 勇志	兵庫県立大学 大学院理学研究科 化学分析学講座	The International Chemical Congress of Pacific Basin Societies 2025 (Pacifichem 2025)	2025/12/15 ～12/20	アメリカ	129
小坂 唯心	大阪大学 大学院工学研究科 生物工学専攻	The International Chemical Congress of Pacific Basin Societies 2025 (Pacifichem 2025)	2025/12/15 ～12/20	アメリカ	130
藤川 昂	物質・材料研究機構 高分子・バイオ材料研究 センター バイオ材料分 野 電気化学ナノバイオ グループ	The International Chemical Congress of Pacific Basin Societies 2025 (Pacifichem 2025)	2025/12/15 ～12/20	アメリカ	131
劉 嘉瑩	自治医科大学 大学院医学研究科 生理学講座統合生理学部門	Biophysical Society 70th Annual Meeting (BPS2026)	2026/2/21 ～2/25	アメリカ	132
南波 憲宏	京都薬科大学 大学院薬学研究科 薬品物理化学分野	Biophysical Society 70th Annual Meeting (BPS2026)	2026/2/21 ～2/25	アメリカ	133
Ballester Roig Maria Neus	久留米大学 分子生命科学研究所 個体システム生物学研究 部門	Gordon Research Conference (GRC) Sleep Regulation and Function	2026/3/1 ～3/6	アメリカ	134
西澤 知里	大阪大学 大学院工学研究科 生物工学専攻 微生物機能工学領域	The 2026 ASBMB Annual meeting	2026/3/7 ～3/10	アメリカ	135
宇佐美 優奈	埼玉県立大学 大学院保健医療福祉学 研究科 国分研究室	Orthopaedic Research Society Annual Meeting 2026	2026/3/27 ～3/31	アメリカ	136

3. 第 36 回学会等開催助成

2025 年度（2025 年 4 月～2026 年 3 月）に国内外で開催されたバイオサイエンス分野の学会・研究会等に対して 19 件の助成を行った。

大会名	申請者	日程	開催場所	参加者 (内海外)
シンポジウム「モレキュラー・キラリ ティー2025」	名古屋大学 大学院工学研究科 井改 知幸	2025/5/16 ～5/17	愛知県	170 (15)
国際会議「植物の生殖発生とゲノミク ス」	東京大学 大学院理学系研究科 東山 哲也	2025/5/18 ～5/22	兵庫県	137 (74)
生物工学若手研究者の集い 夏のセミナー2025	九州大学生体防御医学研究所 メタボロミクス分野 中谷 航太	2025/7/5 ～7/6	福岡県	96 (0)
第 7 回国際植物維管束生物学会議	大阪公立大学 大学院農学研究科 青木 考	2025/7/7 ～7/12	大阪府	169 (105)
第 18 回 Asian Epigenomics Meeting	名古屋大学 大学院医学系研究科 近藤 豊	2025/7/8 ～7/10	岐阜県	52 (32)
第 11 回細胞生物若手の会交流会	東京大学 大学院総合文化研究科 島袋 航弥	2025/7/15	愛知県	70 (0)
第 57 回若手ペプチド夏の勉強会	徳島大学 大学院医歯薬学研究部(薬学域) 傳田 将也	2025/8/3 ～8/5	兵庫県	150 (0)
フリーラジカルスクール 2025	岐阜薬科大学 薬学部 神谷 哲朗	2025/8/7 ～8/8	和歌山県	54 (0)
第 5 回若手放射線影響研究会	電力中央研究所 サステナブルシステム研究本部 橘 拓孝	2025/8/22 ～8/23	茨城県	54 (0)
第 9 回 黒潮カンファレンス	愛媛大学 大学院医学系研究科 茂木 正樹	2025/8/23 ～8/24	広島県	55 (1)
第 2 回免疫ふしぎ未来／第 26 回免疫 サマースクール	鳥取大学 医学部 常世田 好司	2025/8/25 ～8/28	鳥取県	324 (0)
第 65 回 生命科学夏の学校	東京理科大学 大学院先進工学研究科 陣内 響子	2025/8/29 ～8/31	東京都	148 (0)
九州微生物研究フォーラム 2025	琉球大学 大学院医学研究科 山城 哲	2025/9/12 ～9/13	沖縄県	68 (3)

大会名	申請者	日程	開催場所	参加者 (内海外)
生命情報科学若手の会 第 17 回年会	理化学研究所 生命医科学研究センター 金指 勇樹	2025/9/19 ～9/21	兵庫県	41 (0)
赤血球研究シンポジウム 2025	熊本大学 国際先端医学研究機構 三原田 賢一	2025/11/1 ～11/2	大阪府	30 (0)
第 10 回ユニークな少数派実験動物を扱う若手が最先端アプローチを勉強する会	名古屋大学 大学院生命農学研究科 飯田 敦夫	2025/11/22 ～11/24	沖縄県	56 (0)
第 11 回デザイン生命工学研究会	大分大学 理工学部 信岡 かおる	2026/3/6 ～3/7	大分県	111 (10)
第 18 回脳科学若手の会合宿	早稲田大学 人間科学部 山下 愛博	2026/3/14 ～3/15	神奈川県	29 (0)
第 7 回共調的社会脳研究会	科学技術振興機構 研究開発戦略センター 阪口 幸駿	2026/3/28 ～3/29	東京都	21 (0)

注) 所属は申請時のもの

IV. 財団の組織体制

1. 財団の概要 (2025 年 7 月 1 日現在)

名 称	公益財団法人 加藤記念バイオサイエンス振興財団 Kato Memorial Bioscience Foundation
所在地	〒194-8533 東京都町田市旭町三丁目 6 番 6 号
設立許可	1988 年 12 月 23 日
移行登記	2011 年 7 月 1 日
理事長	三箇山 俊文
設立目的	バイオサイエンスの分野における研究を奨励し、科学技術の振興を図り、もって社会の発展と人類の福祉に寄与する。
事業内容	(1) バイオサイエンス及びこれに関連する分野における研究の助成 (2) バイオサイエンス及びこれに関連する分野における研究者の国際交流の助成 (3) バイオサイエンス及びこれに関連する分野における学会・研究会等の開催の助成 (4) バイオサイエンス及びこれに関連する分野におけるシンポジウム・報告会等の開催 (5) 前各号事業の成果の発表及び刊行 (6) その他、本財団の目的を達成するために必要な事業
基本財産	835,649,184 円 (2026 年 3 月 31 日現在)
主務官庁	内閣府 (内閣総理大臣)
出 捐 者	協和キリン株式会社 東京都千代田区大手町 1-9-2 (大手町フィナンシャルシティ グランキューブ)

2. 設立の趣旨

資源の乏しい我が国が今後も繁栄を持続していくには、科学技術の発展が不可欠であります。近年、ゲノムやプロテオーム科学などの先端技術や、それを駆使した細胞レベルの研究など、バイオサイエンスの進歩には目覚ましいものがあります。近い将来、この分野で飛躍的な進歩を達成しうらば、それは我が国の発展のみならず、医療・食糧・環境など地球規模の課題に対しても大きく貢献することが期待できます。

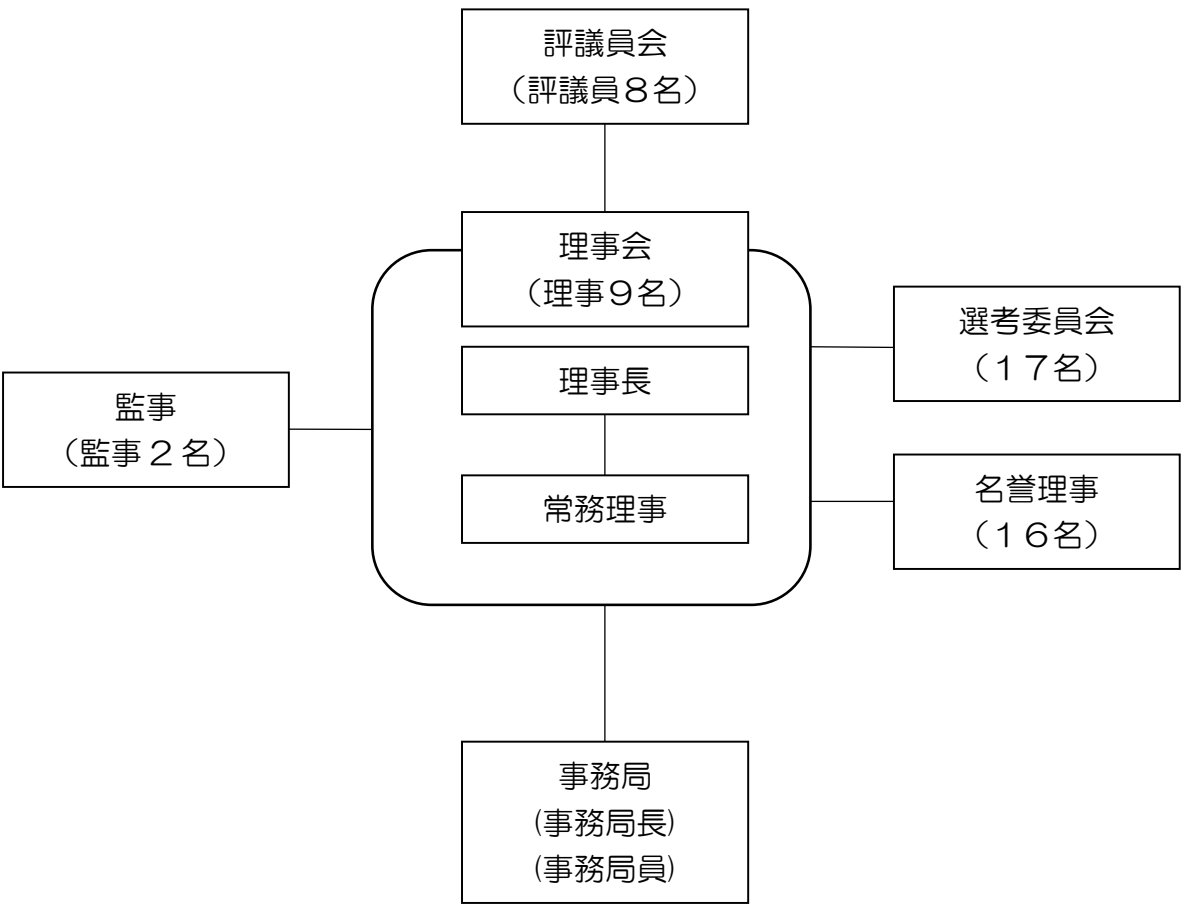
しかし、その実現は容易に成就できるものではなく、長期の視野に立った基礎研究から応用研究まで総合的に推進することが求められます。また、真に価値ある先駆的研究は、個性的で創造性豊かな研究者により、既存の制約を越えた環境下、粘り強い努力の結果、生み出されるものと考えられます。従って、創造的研究を遂行するには、創造的研究の芽を絶やすことなく培うとともに、研究者に対する精神的な援助のみならず、研究の維持継続のための資金的な助成、若い有為な研究者の育成、並び

に国際的な学術交流が強く望まれることは言うまでもありません。

協和発酵工業株式会社の創立者である加藤辨三郎氏は、「バイオサイエンスとテクノロジーの進歩を通して企業活動を発展させるとともに科学技術振興を図り、社会の発展と人類の福祉に貢献する」ことを経営理念としておりました。加藤氏は、昭和 58 年（1983 年）永眠しましたが、40 年余におよぶ会社経営の他に、我が国の多くの科学技術委員会などに関与した体験を通して、バイオサイエンス振興の一層の必要性を強調しておりました。

協和発酵工業株式会社は、こうした加藤氏の遺志をつぎ、また総合的かつ領域横断的にバイオサイエンス研究を振興することの重要性を認識し、同社創立 40 周年記念事業の一環として、昭和 63 年（1988 年）12 月 23 日、財団法人加藤記念バイオサイエンス研究振興財団を設立いたしました。

3. 組 織 (2025 年 7 月 1 日現在)



4. 助成実績および財務状況推移

(1) 研究助成

回	年度 (平成)	応募件数	各年度		累計	
			助成者数	助成額(万円)	助成者数	助成額(万円)
第1回	元年	18	15	3,120	15	3,120
第2回	2年	96	18	3,600	33	6,720
第3回	3年	100	20	4,000	53	10,720
第4回	4年	122	24	4,320	77	15,040
第5回	5年	103	20	4,000	97	19,040
第6回	6年	104	20	4,000	117	23,040
第7回	7年	102	20	4,000	137	27,040
第8回	8年	112	20	4,000	157	31,040
第9回	9年	104	20	4,000	177	35,040
第10回	10年	109	22	4,400	199	39,440
第11回	11年	96	22	4,400	221	43,840
第12回	12年	113	22	4,400	243	48,240
第13回	13年	101	23	4,600	266	52,840
第14回	14年	100	22	4,400	288	57,240
第15回	15年	106	23	4,600	311	61,840
第16回	16年	117	23	4,600	334	66,440
第17回	17年	102	23	4,600	357	71,040
第18回	18年	171	28	5,000	385	76,040
第19回	19年	182	28	5,000	413	81,040
第20回	20年	252	31	5,900	444	86,940
第21回	21年	251	25	5,000	469	91,940
第22回	22年	251	25	5,000	494	96,940
第23回	23年	205	25	5,000	519	101,940
第24回	24年	184	25	5,000	544	106,940
第25回	25年	121	25	5,000	569	111,940
第26回	26年	182	28	5,800	597	117,740
第27回	27年	207	27	5,900	624	123,640
第28回	28年	205	28	5,900	652	129,540
第29回	29年	226	28	5,900	680	135,440
第30回	30年	222	28	5,900	708	141,340
第31回	2019年	200	27	5,300	735	146,640
第32回	2020年	197	29	5,600	764	152,240
第33回	2021年	179	31	5,900	795	158,140
第34回	2022年	160	31	6,000	826	164,140
第35回	2023年	184	31	6,100	857	170,240
第36回	2024年	178	31	6,100	888	176,340
第37回	2025年	200	32	6,300	920	182,640

(2) 国際交流助成

回数	年度 (平成)	応募件数	各年度		累計	
			助成者数	助成額 (万円)	助成者数	助成額 (万円)
第1回	元年	15	10	300	10	300
第2回	2年	52	10	300	20	600
第3回	3年	45	15	450	35	1,050
第4回	4年	95	26	600	61	1,650
第5回	5年	89	22	575	83	2,225
第6回	6年	102	24	600	107	2,825
第7回	7年	97	26	600	133	3,425
第8回	8年	83	30	745	163	4,170
第9回	9年	108	31	740	194	4,910
第10回	10年	114	33	750	227	5,660
第11回	11年	71	32	760	259	6,420
第12回	12年	72	32	750	291	7,170
第13回	13年	78	31	715	322	7,885
第14回	14年	63	33	735	355	8,620
第15回	15年	70	33	745	388	9,365
第16回	16年	63	32	750	420	10,115
第17回	17年	64	30	740	450	10,855
第18回	18年	50	30	715	480	11,570
第19回	19年	74	35	740	515	12,310
第20回	20年	121	31	735	546	13,045
第21回	21年	63	28	705	574	13,750
第22回	22年	109	31	770	605	14,520
第23回	23年	104	31	745	636	15,265
第24回	24年	107	31	755	667	16,020
第25回	25年	91	31	755	698	16,775
第26回	26年	98	31	770	729	17,545
第27回	27年	102	35	855	764	18,400
第28回	28年	112	35	845	799	19,245
第29回	29年	122	35	848	834	20,093
第30回	30年	80	31	755	865	20,848
第31回	2019年	79	28	690	893	21,538
第32回	2020年	44	0	0	893	21,538
第33回	2021年	5	5	17.9	898	21,556
第34回	2022年	27	17	380.8	915	21,937
第35回	2023年	89	39	940.2	954	22,877
第36回	2024年	95	35	872	989	23,749
第37回	2025年	119	36	842	1,025	24,591

(3) 学会等開催助成

回	年度 (平成)	各年度		累計	
		助成件数	助成額 (万円)	助成件数	助成額 (万円)
第1回	元年	3	90	3	90
第2回	2年	4	80	7	170
第3回	3年	5	100	12	270
第4回	4年	5	100	17	370
第5回	5年	6	100	23	470
第6回	6年	5	100	28	570
第7回	7年	5	100	33	670
第8回	8年	7	110	40	780
第9回	9年	5	100	45	880
第10回	10年	7	100	52	980
第11回	11年	5	100	57	1,080
第12回	12年	5	100	62	1,180
第13回	13年	5	100	67	1,280
第14回	14年	5	100	72	1,380
第15回	15年	5	100	77	1,480
第16回	16年	5	100	82	1,580
第17回	17年	7	140	89	1,720
第18回	18年	6	120	95	1,840
第19回	19年	5	100	100	1,940
第20回	20年	10	200	110	2,140
第21回	21年	10	200	120	2,340
第22回	22年	10	200	130	2,540
第23回	23年	10	200	140	2,740
第24回	24年	10	300	150	3,040
第25回	25年	10	300	160	3,340
第26回	26年	13	390	173	3,730
第27回	27年	19	500	192	4,230
第28回	28年	15	400	207	4,630
第29回	29年	21	405	228	5,035
第30回	30年	21	470	249	5,505
第31回	2019年	16	350	265	5,855
第32回	2020年	11	270	276	6,125
第33回	2021年	16	330	292	6,455
第34回	2022年	20	390	312	6,845
第35回	2023年	17	400	329	7,245
第36回	2024年	19	430	348	7,675
第37回	2025年	35	450	383	8,125

(4) 財務状況推移

年度	基本財産 (千円)	受取寄附金 (千円)	運用収入 (千円)
昭和 63 年	200,000	10,000	2,336
平成元年	500,000	50,000	21,585
平成 2 年	500,000	20,000	36,364
平成 3 年	502,000	30,000	29,783
平成 4 年	504,000	40,000	33,418
平成 5 年	505,000	50,000	28,766
平成 6 年	655,000	50,000	24,795
平成 7 年	706,000	130,000	27,688
平成 8 年	706,000	70,000	15,717
平成 9 年	706,000	70,000	7,867
平成 10 年	706,000	75,000	6,216
平成 11 年	706,000	70,000	4,625
平成 12 年	706,000	0	4,170
平成 13 年	706,000	70,000	4,068
平成 14 年	706,000	75,000	4,833
平成 15 年	706,000	75,000	4,826
平成 16 年	706,000	75,000	7,816
平成 17 年	706,000	72,000	3,170
平成 18 年	706,000	72,000	3,197
平成 19 年	706,000	72,000	6,286
平成 20 年	706,000	90,000	7,014
平成 21 年	706,600	76,000	5,807
平成 22 年	783,656	72,000	5,840
平成 23 年	783,654	74,000	6,149
平成 24 年	785,637	72,000	6,256
平成 25 年	707,856	74,000	7,383
平成 26 年	707,455	72,000	8,846
平成 27 年	707,036	72,000	9,920
平成 28 年	706,525	72,010	7,614
平成 29 年	732,411	72,000	7,256
平成 30 年	732,015	72,000	7,960
2019 年	1,012,236	72,000	7,760
2020 年	1,449,239	72,000	7,560
2021 年	1,435,343	72,000	7,560
2022 年	1,638,349	72,000	7,610
2023 年	1,144,954	72,000	7,628
2024 年	846,526	72,000	9,391
2025 年	835,649	72,000	9,642

※基本財産は各年度末の保有額

V. 2025 年度募集要項

第 37 回（2025 年度）加藤記念研究助成募集要項

1. 助成の趣旨

本研究助成は、バイオサイエンス分野における有能な若手研究者を見出し、その創造的かつ先駆的研究を支援することを目的とする。

2. 助成対象研究領域・課題

（1）M 分野 「メディカルサイエンス分野」

医薬・医療への応用を念頭に行う基礎的研究及びヒトを含む哺乳動物等を対象とした生物学的基礎研究も M 分野に含める。（以下は例示）

- ・ 哺乳動物の個体、組織、細胞等を用いて発生・生理・薬理・病理現象等を解析する研究
- ・ 臨床応用を目指した基礎研究（医薬品候補の探索・生産研究は B 分野とする）
- ・ 病態の診断・治療技術の開発及びその基礎となる研究
- ・ 臨床研究に対する当財団の対応は HP 記載の「臨床研究支援に対する公表について」を参照

（2）B 分野 「バイオテクノロジー分野」

生物材料や生物機能を利用し、物質生産、有用物質探索、環境関連、汎用技術の開発・応用等を念頭に行う研究（以下は例示）

- ・ 微生物・植物・動物等の機能解析、またはそれらを利用して物質生産等に繋げようとする研究
- ・ 有用物質・生理活性物質（医薬品候補含む）の探索、構造解析等に関する研究
- ・ 食糧・環境・エネルギー等に関わる生物材料や生物機能等を利用した基礎的研究
- ・ タンパク質等の生体成分・遺伝情報等の解析・応用技術の開発（インフォマティクス含む）

（3）E 分野 「環境バイオ分野（奨励研究）」

持続可能な開発目標（SDGs）への貢献が期待される、バイオテクノロジーを活用した環境関連研究のうち基礎的研究

- ・ 重点的な課題：水資源の保護、温暖化の防止、生態系の保護・生物多様性の保全、当該分野に資する技術革新
- ・ （キーワード例示）バイオマス、生分解性材料、再生可能エネルギー、生物模倣、育種、環境浄化、資源循環、分析、メタゲノム、毒性評価等
- ・ ただし、工学的・社会科学的・人文科学的な研究は含まない。

3. 助成金額・期間

（1）助成金額

M 分野及び B 分野

1 件当たり 200 万円、27 件程度。2 分野の助成割合は応募者比率を考慮する。

選考委員会で優れたテーマであると評価された場合には、さらに 100 万円を増額する（総額 300 万円）

E 分野（奨励研究）

1 件当たり 100 万円、4 件程度

選考委員会で優れたテーマであると評価された場合には、さらに 100 万円を増額する（総額 200 万円）

(2) 助成期間

2026 年 4 月～2028 年 3 月（2 年間）

- ・ 助成期間中に妊娠・出産・育児・不妊治療・介護・病気等の為休業する者、留学する者については、助成期間延長が可能

4. 応募資格

国内の大学（高等専門学校含む）又は公的研究機関に所属し、以下の条件を満たす研究者とする。

(1) 年齢（9 月末日）

- ・ M 分野及び B 分野：40 歳以下 E 分野：35 歳以下
- ・ ただし、以下の例外を認める。
- ・ 応募時まで以下に以下の事由により休業した者については、性別を問わず年齢制限を延長する。
 - 1) 妊娠・出産・育児休業を取得した者については、休業期間が 2 年以下の場合は一律 2 年、2 年を超える場合は取得した期間の延長を認める。なお、複数回取得した場合はそれらを合算した期間とする。
 - 2) 介護・不妊治療・その他疾病等により休業した者については、その休業期間の延長を認める。
- ・ M 分野及び B 分野は、博士号取得後 10 年以内であれば 41 歳以上の応募も可。
- ・ E 分野は、博士号取得後 5 年以内であれば 36 歳以上の応募も可。

(2) 除外対象

- ・ 学生、大学院生は原則応募不可（例外規定有。HP 記載の Q&A 参照）
- ・ 過去に本助成を受領し 2 年間経過していない者は応募不可（第 35 回以降の助成（2024 年 4 月以降研究開始）を受けた者は対象外）
- ・ 当財団選考委員と同一研究室に所属する者は応募不可
- ・ 主として国外で研究する場合は応募不可（ただし助成中に留学した場合は助成期間を延長することができる）

(3) 応募課題（内容）の独自性

- ・ 本人以外の者（例えば同じ研究室の者）が研究代表者となって国や民間財団等から研究助成を受けている研究内容と実質的に同一とみなされる、または極めて類似性が高いと判断される場合は応募不可。
- ・ 選考委員会で上記に該当すると判断された場合は本助成の対象外とする。

(4) 重複助成制限

- ・ 本年（2025 年 1 月～12 月）に、初年度分 1,000 万円以上の公的助成（科研費等）又は初年度分 300 万円を超える他財団等からの助成金受領が決定（内定含む）した者は本助成の対象外。（複数助成の場合はそれぞれ合算）（詳細は HP 記載の Q&A 参照）
- ・ 選考委員会後の採択内定通知時に上記重複助成の有無を確認しますので、該当する場合は本研究助成受領を辞退いただくことがあります。

5. 応募方法

財団ホームページから研究者登録を行い、受付フォームに入力後、下記の書面の PDF 版をアップロードする。（提出書類は英語可。ただし財団からの諸連絡（メールを含む）は日本語で行う。）

内定連絡等はメールで行うので、必ず普段使いのメールアドレスで研究者登録する。

提出書類

- ・ 「申請内容概要」：文字のみ、捺印不要。
- ・ 「申請書」：図・写真の掲載も可能。選考委員には白黒コピーで配布する。
PDF 化して提出。捺印不要。
- ・ 「推薦書」：公印捺印後 PDF 化して提出。原本の郵送は不要。

6. 応募枠（推薦者）

各部局等の応募枠は以下のとおり。当該部局の長（学部長、研究科長等）又は研究機関長等の推薦書を添付する。

（1）大学

- ・ 学部（大学院研究科）毎に M 分野または B 分野どちらかの分野で 1 名。さらに別枠で E 分野 1 名。
- ・ 名称が学部・大学院研究科でない場合も、一般的な学部・研究科の概念に従う。尚、学部付属病院・学部附属研究所は、学部と同じ枠に含める。（HP 記載の Q&A 参照）

（2）国公立研究所及びその他公的研究機関

- ・ M 分野または B 分野どちらかの分野で 1 名。さらに別枠で E 分野 1 名。ただし理研、産総研等の大規模研究機関・機構の場合は、傘下の研究所を応募単位とする。（HP 記載の Q&A 参照）

7. 募集期間

2025 年 7 月 1 日（火）～9 月 30 日（火）

8. 選考及び決定

- （1）2025 年 12 月開催の選考委員会で選考の上、2026 年 2 月開催の理事会で決定。
- （2）当落線上の絞り込みにあたっては以下を考慮。（順不同）
 - ・ 研究室・テーマ立ち上げ状況を考慮。特に海外留学帰国時の立ち上げ。
 - ・ 新設・小規模の研究機関を優先。
 - ・ 若手研究者を優先。
 - ・ 他財団等から同年度に助成を受けない者を優先。
 - ・ 性別バランスに配慮。
 - ・ 任期制職種に配慮。
 - ・ 同一機関への集中を避ける。

9. 採否通知

- （1）内定通知：2026 年 1 月上旬までに採択予定者に電子メール連絡。（受諾確認）
- （2）正式通知：2026 年 2 月末までに全採択者に書面で通知。採択者の推薦者にも通知。

10. 助成金の贈呈

（1）贈呈式

2026 年 3 月 6 日（金）如水会館（東京都）にて開催するので参加のこと。旅費支給。

（2）助成金贈呈方法

2026 年 3 月末までに原則として所属機関に寄附手続きの上で振込む。

11. 助成金の扱い

- ・ 申請し採択された研究内容に限る。
- ・ 物品購入費用に限定せず、旅費・会議参加費・外注費等も認める。ただし、本人及び共同研究者の労務費は対象外。（研究補助者の謝金等は可）

- ・ 研究内容や使途の大きな変更は財団の事前承認を要する。
- ・ 研究機関の間接経費・一般管理費（オーバーヘッド）は認めない。
- ・ 他の研究機関・組織に転任し助成課題を継続する場合は、本人に対する研究助成金として新たな研究機関・組織に移し換えを行うこと。
- ・ やむを得ない事情により研究を中断する場合は、原則としてその時点で報告書を提出し、助成金残額は返金すること。

12. 研究成果等の報告

（1）研究成果報告書

2028年3月末迄に所定書式で提出。（Webマイページにアップロード）

全文を当財団の年報に、概要を当財団のホームページにそれぞれ掲載し公開する。

（2）会計報告書

2028年4月末までに提出。（Webマイページにアップロード）

（3）報告交流会

2028年秋に東京近辺にて開催するので、参加し報告すること。旅費支給。

13. その他

- ・ 応募に際しては財団ホームページ「研究助成 Q&A」を参照のこと。
- ・ 本助成に関して取得した個人情報は、財団ホームページ掲載の「個人情報について」に従い、本助成に必要な業務に限定して利用する。
- ・ 助成決定者については、財団のホームページ・年報などにより、氏名、所属機関、職名、助成対象となった研究題目等を公表する。
- ・ 助成後であっても、研究倫理や経理処理等について重大な問題が発覚した場合は、過去に遡って助成を取り消し、助成金返還を求めることがある。

以上

連絡先 : 公益財団法人 加藤記念バイオサイエンス振興財団 事務局
〒194-8533 東京都町田市旭町 3-6-6
TEL : 042-725-2576 FAX : 042-729-4009
E-Mail : zaidan@katokinen.or.jp
URL : <https://www.katokinen.or.jp/>

第 37 回（2025 年度）加藤記念国際交流助成募集要項

1. 助成対象者 : 2025 年 4 月 1 日から 2026 年 3 月 31 日の期間に、海外で開催されるバイオサイエンス分野の学会、シンポジウム等で、自己の研究成果を発表する日本国内在住の研究者（外国籍含む）。
上期（4／1～9／30 に初日を迎える学会）、下期（10／1～翌年 3／31 に初日を迎える学会）の 2 回に分けて公募する。
オンライン開催の国際学会等で発表する研究者も対象とする。
2. 申込資格 : ①応募締切日に 35 歳以下の研究者。
②過去に本財団から助成金を受領し 2 年間経過していない人は対象外。（第 35 回研究助成・第 35 回国際交流助成（上期）以降の助成金受領者は対象外）
※オンライン学会の助成者については財団 HP の Q&A を参照。
③大学院生可。応募時の学部学生不可（6 年制の学部は 5 年生以上可）。
④社会人大学院生については、教育・研究・医療機関等に在籍している者は応募を認めるが、企業等に在籍している者は応募不可。
3. 推薦者 : 申請者の現所属機関・研究室の上長（教授、主任研究員などの PI 相当職（注））。推薦者は 1 名のみ推薦可。上期に本助成を受領した研究者の推薦者は、その年度下期は推薦できない。
4. 助成金使途 : ①学会・シンポジウム等の参加経費（PCR 検査費・旅費・滞在費・参加費・※通信経費・懇親会費・情報交換経費・発表資料作成費等）として助成する。
※オンライン参加限定（詳細は財団 HP の Q&A 参照）
②当財団は渡航に合わせて留学希望先や共同研究先等への訪問を推奨している。この訪問旅費等に一部充てることが構わない。
③助成金より間接経費等として大学等が徴収することは認めない。
5. 助成金額 : 年間予算総額 850 万円程度。（上期下期合わせて 35 件程度）。
《渡航地域別の 1 件当たり助成金額》

・欧州・南米・アフリカ :	30 万円
・北米（東部）・メキシコ :	25 万円
・ロシア・西南アジア :	25 万円
・北米（西部）・オセアニア・インド :	20 万円
・東南アジア :	15 万円

- ・東アジア（中国・韓国・台湾）： 10 万円
- ・オンライン（日本国内）：実費（円建て）（上限 10 万円）

- 1) 他財団や学会等から重複して参加経費等の補助を受ける場合は、採択を見送る、又は減額して助成を行うことがある。
- 2) 採択決定後に参加学会等がオンライン開催に変更となった場合、助成金額はオンラインの金額に変更となる。
- 3) オンラインの実費に関しては、詳細は財団 HP の Q&A 参照のこと。

6. 応募方法： 申請書 当財団ホームページ（HP）から研究者登録を行い、受付フォームに入力後、PDF 版をアップロードする。捺印不要。

推薦書 以下のいずれかの方法で提出する。

推薦者の捺印後、PDF 化し、申請者からアップロードする方法。

①推薦者から直接メールにて財団に提出する方法。

- ・事前に申請者より財団事務局にメールにて、推薦者から推薦書を直接送付する旨を伝え、了解を得る。
- ・推薦者から財団事務局に推薦書（捺印後 PDF 化）をメール送付。
- ・提出の際のメールのタイトルには「【推薦書提出】加藤記念国際交流助成」と記載する。
- ・申請者は白紙の推薦書をダミーとしてアップロードし、申請手続きを終了させる。

7. 応募期間： ①上期：2025 年 1 月 4 日～2 月 28 日

②下期：2025 年 7 月 1 日～8 月 31 日

8. 審査方法： 当財団の選考委員による審査の上、財団所定の手続きを経て決定。

9. 採否の通知： ①上期：3 月下旬頃に申請者に通知。

②下期：9 月下旬頃に申請者に通知。

他財団や学会等から参加経費等の補助を受ける予定（可能性）がある場合、内定通知時にその内容と予算の概略を提出すること。

10. 助成金支給： 所属機関と協議の上、機関への寄附もしくは個人管理を選択。助成金は学会での発表が受理されたことを確認した後、振り込む。ただし学会開催時期により、事後支払いとなる事がある。

学会終了後 1 ヶ月以内を目途に会計報告を提出すること（書式自由）。

なおオンライン学会の助成金については、実費のため会計報告提出後に振り込みとする。

11. 報告書提出： 学会終了後 1 ヶ月以内を目途に所定の書式で提出する。

12. 情報公開： ・助成が決定した場合、氏名、所属機関、職名、参加学会名、演題等を財団 HP 等により公開する。
・提出いただいた報告書は、当財団の「財団年報」（冊子体、2026 年 8 月頃発刊予定）に掲載する。

財財団 HP の「よくある質問：国際交流助成 Q&A」を必ずご確認ください。ご不明な点等については事務局までお問い合わせください。なお採択後であっても研究活動の不正行為が発覚した場合は助成を取消し、助成金の返還を求めることがあります。

連絡先： 公益財団法人 加藤記念バイオサイエンス振興財団 事務局
〒194-8533 東京都町田市旭町 3-6-6
TEL：042-725-2576
FAX：042-729-4009
E-Mail：zaidan@katokinen.or.jp

（注）PI（Principal Investigator, 研究室主宰者）とは、ここでは独立した研究室を持つ、研究グループの予算作成・執行の責任者、担当課題の予算作成・執行の責任者、特定の部下（大学院生等含む）の指導の責任者、発表論文の責任者、の全てを実質的に満たす研究者とします。申請者ご自身が PI の場合は、上位者による推薦が必要です。

第 37 回（2026 年度開催分）学会等開催助成募集要項

1. 助成対象

2026 年度（2026 年 4 月～2027 年 3 月）に国内外で開催されるバイオサイエンス分野の基礎的研究に関する学会・研究会・シンポジウム（以下、学会等）で、以下全ての条件を満たすもの。

- ・ 原則として参加者が 500 人以下のもの
- ・ クローズドな会でなく外部／新たな参加者を認めるもの
- ・ 開催方法は、リアルでもオンラインでも可

2. 申請資格者

- ・ 原則として学会等の開催責任者（学会長、組織委員長等）
- ・ 大会組織委員等による代理申請可能（事務局職員・事務委託業者による申請は不可）
（注 1）事務手続きを日本語で進めることから、国外開催の場合も日本語で対応可能なこと（申請書の英語記載は可能）
（注 2）申請者が本助成の選考に関わる場合は申請不可

3. 助成金額

- ・ 1 件 10 万円、20 万円、30 万円。助成総額 400 万円程度
- ・ 学会等の規模等に応じて当財団が各々の助成額を決定する
- ・ 使途：学会等の準備・運営に掛かる一切の費用

4. 申請期間

2025 年 11 月 1 日～30 日

5. 申請方法

申請者（開催責任者又は代理申請者）は財団ホームページから研究者登録を行い、受付フォームに入力する。代理申請の場合は開催責任者情報も入力する。その後、所定の申請書（英語での記載可）の PDF 版をアップロードする。補足資料（趣意書、開催案内等）があれば PDF でアップロード。アップロードできない補足資料は事務局宛に郵送する。詳細は財団 HP の Q&A を参照のこと。

6. 選考及び決定

- ・ 2025 年 12 月の選考会の結果に基づき、2026 年 2 月の理事会で決定する
- ・ 申請数が採択枠を超えた場合、選考基準として以下を総合的に考慮し、判断する優先度の高いもの
 - ① 合宿形式のいわゆる「若手の会」
 - ② 小規模・予算が少ないもの
 - ③ 基礎的研究に比重があるもの
 - ④ 新規分野のため開催実績が少ないもの

- ⑤ 若手又は海外からの参加者が多いもの
- ⑥ 国外開催の場合は日本からの参加者が多いもの
- ⑦ 過去に本助成を受けた回数の少ないもの
- ⑧ 市民や児童生徒向け企画等を含むもの

優先度の低いもの

- ① 大きな大会の一部として開催される分科会
- ② 地域性の高い集会

7. 採否通知

2026 年 1 月に採択予定者に内定通知を行い、2 月末までに全申請者に正式通知する。

8. 助成金支給

2026 年 3 月末までに学会等の指定口座に振込む。

9. 結果報告

開催後 1 ヶ月を目途に、財団 Web サイトに開催報告書・会計報告書を提出。

講演要旨集一部を財団事務局に郵送。

郵送・問合せ先：公益財団法人 加藤記念バイオサイエンス振興財団 事務局

〒194-8533 東京都町田市旭町 3-6-6

TEL：042-725-2576 FAX：042-729-4009

E-Mail：zaidan@katokinen.or.jp

VI. 2025 年度財団役員等

理 事

(2025 年 4 月 1 日現在)

理事長 (非常勤)	三箇山 俊文	元協和キリン(株) 取締役副社長
常務理事 (非常勤)	石 田 浩 幸	協和キリン(株) 開発本部 TR マネジメントオフィス
理事 (非常勤)	長 田 裕 之	(公財)微生物化学研究会・微生物化学研究所 特任部長
	佐 々 義 子	くらしとバイオプラザ 21 常務理事
	谷 口 維 紹	東京大学先端科学技術研究センター フェロー 東京大学 名誉教授
	中 西 友 子	東京大学大学院農学生命科学研究科 特任教授 東京大学 名誉教授
	長 澤 寛 道	東京大学 名誉教授
	福 山 透	東京大学 名誉教授
	三 品 昌 美	東京大学 名誉教授

監 事

監事 (非常勤)	樋 口 節 夫	樋口節夫公認会計士事務所 公認会計士
	柴 毅	公認会計士 柴 毅 事務所 公認会計士

評議員

評議員会長 (非常勤)	江 崎 信 芳	京都大学 名誉教授
評議員 (非常勤)	川 口 元 彦	協和キリン(株) 常務執行役員 Chief Financial Officer
	木 野 邦 器	早稲田大学理工学術院 先進理工学部 教授
	五 味 勝 也	東北大学大学院農学研究科 名誉教授
	反 町 典 子	東京大学大学院理学系研究科 教授
	宮 島 篤	東京大学定量生命科学研究所 特任教授 東京大学 名誉教授
	山 本 一 彦	理化学研究所 生命医科学研究センター チームディレクター
	吉 田 稔	理化学研究所 理事 東京大学 特別教授

名誉理事

(2025 年 4 月 1 日現在)

名誉理事	伊 藤 醇	公認会計士
	大 塚 榮 子	産業技術総合研究所 名誉フェロー 北海道大学 名誉教授
	大 村 智	北里大学大村智記念研究所 特別名誉教授 北里大学 特別名誉教授
	折 茂 肇	(公財)骨粗鬆症財団 理事長
	香 川 靖 雄	女子栄養大学 副学長・栄養科学研究所長 自治医科大学 名誉教授、客員教授
	垣 添 忠 生	(公財)日本対がん協会 会長 国立がんセンター 元総長
	勝 木 元 也	基礎生物学研究所 名誉教授
	岸 本 忠 三	大阪大学免疫学フロンティア研究センター 特任教授 千里ライフサイエンス振興財団 名誉理事長
	北 原 武	東京大学 名誉教授 北里大学 客員教授
	木 村 光	京都大学 名誉教授 (株)グリーンバイオ 代表取締役
	郷 通 子	長浜バイオ大学 特別客員教授
	榊 佳 之	(学)静岡雙葉学園 特別顧問
	高 津 聖 志	東京大学 名誉教授
	中 嶋 暉 躬	東京大学 名誉教授
	平 田 正	元 協和発酵工業(株) 会長
	松 田 讓	元 協和発酵キリン(株) 社長
	柳 田 敏 雄	大阪大学大学院情報科学研究科 特任教授

選考委員

(2025 年 4 月 1 日現在)

選考委員長	葛 山 智 久	東京大学大学院農学生命科学研究科 教授
選考副委員長	藤 尾 圭 志	東京大学大学院医学系研究科 教授
選考委員	岩 崎 博 史	東京科学大学 総合研究院 教授
	王子田 彰夫	九州大学大学院薬学研究院 教授
	大 塚 基 之	岡山大学学術研究院医歯薬学域 教授
	尾畑 やよい	東京農業大学生命科学部 教授
	菅 波 孝 祥	名古屋大学 環境医学研究所 教授
	竹 内 理	京都大学大学院医学研究科 教授
	武 田 憲 彦	東京大学大学院医学系研究科 教授
	竹本 さやか	名古屋大学 環境医学研究所 教授
	藤 間 祥 子	奈良先端科学技術大学院大学 先端科学技術研究科 准教授
	豊 島 文 子	東京科学大学 総合研究院 難治疾患研究所 兼 京都大学 医生物学研究所 教授
	中 嶋 正 敏	東京大学大学院農学生命科学研究科 教授
	林 香	慶應義塾大学 医学部 教授
	日 比 正 彦	名古屋大学大学院理学研究科 教授
	政 井 英 司	長岡技術科学大学工学研究院 教授
	村 田 武 士	千葉大学大学院理学研究院 教授

おわりに

事務局長 橋 本 誠

2025 年度の財団活動年報をお届けします。2025 年度も数多くのユニークな研究活動を支援することができました。助成活動をご支援いただいた先生方や関係者の皆さまに感謝申し上げます。

今期の助成事業のトピックスについてご紹介いたします。

国際交流助成は、2023 年度下期からコロナ禍以前の水準（40 名前後）を上回る応募が続いていますが、2025 年度下期は過去最多の 78 名、続いて 2026 年度上期も 67 名の応募をいただきました。当財団の助成額は 1 件あたり 10 万円から 30 万円と平均的な水準であり、昨今の渡航関連費用の高騰を考慮しますと十分なご支援ができないことを心苦しく思っております。他の助成金との併用や一部返金を認めるなど、柔軟に利用できる点を特色として応募者に PR しておりますが、金額を含めた事業見直しの検討も併せて進めて参ります。

一方で国内研究を支援する研究助成は、2025 年度の応募者数が 200 名となり、ようやくコロナ禍以前の水準（200 名以上）に回復しました。また女性の応募者数（内数）については、2023 年度にライフイベント関連での年齢制限緩和対策を実施して以降、39 名⇒36 名⇒41 名と 3 年続きで好調でした。

当財団では従来から、重複助成制限の運用等を通じて、多くの財団から助成を受ける一部の研究者への資金集中よりも、全国津々浦々で研究に取り組むより多くの研究者に研究機会を提供することを重視して参りました。しかし、この方針の背景にある意義や価値について、自分の中で十分に整理し切れないまま業務に携わってきた面もありました。

昨年 11 月「助成財団フォーラム」の基調講演で竹内薫先生が語られた「多種多様な研究の芽を殺さない」「資金の集中投下は芽が育ってから」「基礎研究への支援は、広く浅く」との言葉に接し、当財団が重視してきた方針の意味を改めて深く認識することができました。もちろん、当財団の助成規模は限られており、個々の助成がもたらす支援も決して大きなものではありませんが、「基礎研究への支援は、広く浅く」という考え方や価値を応援し、制度運用等を通じてそれを発信し続けることが、当財団ならではの役割であると感じております。

最後になりますが、私、橋本誠は出向元での再雇用期間満了に伴い、9 月末をもって退任いたします。2019 年 7 月の着任以来、関係者の皆様には格別のご支援とご協力を賜りましたことに心より感謝申し上げます。なお、8 月には後任として篠田克己事務局長が着任しております。

今後とも加藤記念財団への変わらぬご支援をお願い申し上げます。

編集後記

13回目の編集後記を書いております。

当財団の2025年度の年報が出来上がりました。

お読み頂き、誠に有り難うございます。

2025年度も、当財団の事業運営に多大なるご理解とご協力を賜りました研究者の皆様、役員、評議員、選考委員の先生方をはじめ、関係者の皆様に心より御礼申し上げます。

2025年度は、大阪・関西万博の開催により、生命科学や医療技術が広く社会の注目を集めた一年となりました。中でも、iPS細胞から作製された心筋シートや拍動する「iPS心臓」の展示は、多くの人々に未来の医療への希望と可能性を感じさせるものでした。こうした研究成果は、一朝一夕に生まれたものではなく、研究者の皆様による長年の地道な努力と挑戦の積み重ねによって実現されたものであり、生命科学研究の持つ大きな力を改めて実感しました。

本年報には、当財団の助成を受けられた研究者の皆様による研究成果や活動報告を掲載しております。それぞれの研究には未知の課題に果敢に挑む情熱と創意工夫が込められており、生命科学のさらなる発展を担う力強い可能性を感じます。特に若手研究者の皆様が新たな発想のもと研究に挑戦され、その成果を未来へとつなげていかれることを心より期待しております。

科学技術を取り巻く環境が大きく変化する中であっても、人々の健康や豊かな未来に貢献したいという研究者の志は変わることがありません。当財団も微力ながら、その歩みを支える存在であり続けたいと考えております。

本年報が、生命科学研究への理解を深めるとともに、新たな交流や研究発展の一助となれば幸いです。

(事務局員 川上裕子)

(公財)加藤記念バイオサイエンス振興財団 2025年度 年報 (第27号)

発行日	令和8年8月31日
発行者	理事長 大澤 豊
編集者	常務理事 石田 浩幸 事務局長 篠田 克己 事務局次長 橋本 誠
発行	公益財団法人 加藤記念バイオサイエンス振興財団 Kato Memorial Bioscience Foundation 〒194-8533 東京都町田市旭町3-6-6 電話：042-725-2576 ファックス：042-729-4009 メール：zaidan@katokinen.or.jp ホームページ：https://www.katokinen.or.jp
印刷	芝サン陽印刷株式会社 〒135-0031 東京都江東区佐賀1-18-10

(禁・無断転載)